

鹿児島県立短期大学
地域研究所 叢書

日中両言語ブログによる 鹿児島観光情報発信

「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」最終報告書

ピカリン☆PJの成果は不朽です

鹿児島県立短期大学
学長 種村 完司

2年前の中間報告書の冒頭で、私は、このプロジェクトがわが県短で今「いちばん自慢できるホットで楽しい地域貢献の取り組みだ」と胸をはって断言した。この思いは今でも変わらない。「ホットで楽しい」という中身と性格は、ちっとも色あせていないし、それどころか倍加している。プロセスを見守ってきた私は、取り組みじたいのいっそうの広がり、質のいっそうの深まりを感じないわけにはいかない。

取り組みの広がりという点では、鹿児島に特有の「島」の魅力に着目し、鹿児島本土だけでなく、甕島、沖永良部島、種子島などの離島をたずね、それらの島々の自然・景観・文化のよさを発掘したことが挙げられる。また、鹿児島各地の観光を活性化させる上で、ホテルや旅館、NPO法人、さらには公的機関や高校との提携・協力をすすめることの大切さを身をもって掴みとり、そうした教訓を引き出してくれたことがうれしい。

取り組みの質の深まりという点では、鹿児島の魅力を中国本土向けの「簡体字」によって発信するだけでなく、台湾や香港で使用されている「繁体字」による情報発信を始めたことがその一つだろう。これは、鹿児島ー台北間の国際定期便開通による台湾からの観光客増加という動向をすばやくキャッチしての対応だ。さらに、この報告書の中にあるように、離島をアピールする種々のキャッチコピー例が考案されている。このプロジェクトが観光地紹介にとどまらず、観光客の心をどうつかんだらよいか、鹿児島観光の質を上げるためにどんな努力をしたらよいかについて、すぐれた示唆を与えていることがわかる。食文化の紹介の面で、清冽で豊かな湧水を利用した「そうめん流し」の堪能、カツオ節生産が日本一の枕崎での生産現場の見学や「鯉船人めし」の試食、南九州市でのお茶畑訪問と生産者との語りなどの実体験は、中国人留学生に新鮮な感動を与えており、それらがブログを用いての発信によって、かれら自身の人間的成長を促していることが印象的だ。

ピカリン☆プロジェクトにおけるこうした活動は、この3年間、ただ漫然と続けられたのではなく、留学生たち、鹿児島の観光産業の人々、外国人観光客などにたえず注意をはらい、彼らの関心や利害を積極的にうけとめ、それらに誠実に対応して進化・発展しつづけてきた取り組みであったことをよく示している。だからこそ、この最終報告書が強調しているように、この取り組みは、けっして一過的なものではなく、他の地域で、あるいは後々にこの種の試みを開始しようとする人々にとって、まちがいなく貴重な先例となり、不可欠の礎石を提供するものになっていると思う。

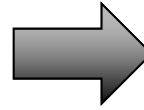
このプロジェクトに参加し大事な成果と教訓を残してくれた、留学生、在学生、そして教員のみなさん、ほんとうにご苦労さま、そしてありがとう。

中国留学生眼中的鹿児島

- ・実際に、日中両言語のブログをみてみたい。

<http://kagochina3.sblo.jp>

へ今すぐアクセス

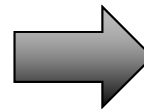


中間報告書(2012年3月)

- ・「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」の名前の由来、設立理由、活動の目的・意義などを知りたい。

<http://www.k-kentan.ac.jp/area/pikarinreport.pdf>

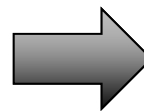
へ今すぐアクセス



最終報告書(2014年3月)

- ・「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」の成果を知りたい。
- ・ブログにどれくらいのアクセス数があったのか知りたい。
- ・教育効果について知りたい。

今すぐ次のページへ



目次

第1章 プロジェクト実施の概要	
1-1 プロジェクトの概要	1
1-2 プロジェクト実施の背景：増える外国人旅行者	3
1-3 プロジェクト実施の目的	6
第2章 プロジェクト報告	
2-1 プロジェクトからのフィードバック	7
2-2 未完のプロジェクト	11
第3章 多言語ブログ	
3-1 簡体字と繁体字による情報発信	14
3-2 アクセス解析の意義と手法	14
3-3 アクセス解析結果	16
3-4 既存メディアと SNS	19
第4章 教育効果	
4-1 中国人留学生への教育効果	20
4-2 日本人学生への教育効果	29

第1章 プロジェクト実施の概要

1-1 プロジェクトの概要

この小冊子は、鹿児島県立短期大学（図1-1、以下本学と記す）の有志が行ってきた「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」についての最終報告書である¹。

「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」とは、2011年2月から本学で開始した「日中両言語による鹿児島の観光情報をブログにて発信する事業」の通称であり、その事業内容は本学に在籍する中国人留学生、日本人学生、教員が、鹿児島の観光情報について日本語と中国語を用いてブログにて発信していくというプロジェクトである。

このプロジェクトの柱は、図1-2に示したようなブログ「中国留学生眼中的鹿児島（中国人留学生が紹介する鹿児島）」

を立ち上げ、ウェブ上で鹿児島の観光情報について日本語と中国語で情報を発信していくことである。当初、中国語は中国本土向けの簡体字（かんたいじ）のみを使用していたが、後述するように台湾からの観光客が増加している現状を考慮して、台湾そして香港で使用されている繁体字（はんたいじ）での情報発信も2013年より開始した。

現在、世界的にブログやTwitter、Facebookなどのソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の使用が普及しているが、「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」では、図1-2で紹介したブログの画像のように、日本語と中国語（簡体字と繁体字）の二言語併記にこだわっている。なぜ、二言語併記にこだわるのか。それは、留学生の視点を通じて、日本人では気づかない観光地のアピールポイントや見逃していた魅力、さらには外国人でしか気づかないマイナスポイントや改善点を見つけ出すことができるからである。中国語と日本語を併記することで、留学生の視点を日本人も共有でき、地元の魅力を再発見していくことが可能になる。

また、本プロジェクトの実施にあたっては、その汎用性にも留意した。このプロジェクトで扱う観光地や観光情報は、鹿児島という一地域のものだが、外国人観光客誘致を目指す他の地域でも、本プロジェクトで提示したアイデアや経験を用いることにより、同じようなプロジェクトを実施することが可能なのではないかと考えている。



図1-1 鹿児島県立短期大学

¹ 本プロジェクトでは、2012年に中間報告書を作成している。本事業の目的や背景、名称の由来などの詳細は、鹿児島ピカリン☆プロジェクト編『日中両言語ブログによる鹿児島観光情報発信 「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」中間報告書』（2012年3月発行）を参照のこと。この報告書は、本学ホームページからも閲覧することができる。URLは次のとおりである。<http://www.k-kentan.ac.jp/area/pikarinreport.pdf>。

中国留学生眼中的鹿児島
鹿児島県立短期大学の
鹿児島ヒカリンプロジェクト
[中国人留学生が紹介する鹿児島]

2013年07月30日

大隅半島への宝探し

皆さんご存知のとおり、鹿児島県には薩摩半島と大隅半島の二つの半島があります。私たちが普段暮らしているのは、薩摩半島です。
ある晴れた日に、ずっと憧れていた大隅半島をたずねました。宝探しという名の下で、私達は大隅半島での冒険の旅を始めました。

正如大家了解的那样，鹿児島是有萨摩半島和大隅半島这两个半島的。在一个晴朗的日子里，我们探访了向往已久的大隅半島。我们以寻宝的名义开始了这一天的探险之旅。

正如大家了解的那样，鹿児島是有薩摩半島和大隅半島這兩個半島的。在一個晴朗的日子裏，我們探訪了向往已久的大隅半島。我們以尋寶的名義開始了這一天的探險之旅。



まず、最初に訪問したのは鹿屋です。ここでは海の写真をお見せしましょう。きれいでしょ。鹿児島と言ったら、普通温泉が満喫できるというイメージが浮かぶんですが、海も満喫できますよ。

首先到达的是鹿屋市。话不多说，先给大家看一张大海的照片吧。怎么样，不错吧～说起鹿児島，一般能想到的肯定是温泉啦。不过在这里也能大饱看海的眼福哦。

首先到達的是鹿屋市。話不多說，先給大家看一張大海的照片吧。怎麼樣，不錯吧～說起鹿児島，一般能

日本語

簡体字
(中国本土)

繁体字
(主に台湾、香港、
東南アジアの
中華系)

留学生が撮影
した写真

出所) <http://kagochina3.sblo.jp/article/71526335.html> (2013年12月23日閲覧)

図 1-2 ブログ「中国留学生眼中的鹿児島 (中国人留学生が紹介する鹿児島)」

1-2 プロジェクト実施の背景：増える外国人旅行者

近年、日本では本格的な少子高齢化社会を迎えるなかで、全国的に観光産業が注目されている。観光産業は今後の成長が見込まれる分野であり、また地域への波及効果のすそ野が広い産業であり、全国で観光客誘致が行なわれている。

2013年はこうした動きに、さらに拍車をかける大きなニュースが報じられた年であった。すなわち、富士山がユネスコ世界文化遺産へ登録され、2020年オリンピック開催地に東京が選ばれ、そして和食がユネスコの世界無形文化遺産へと登録された。そして2013年は、訪日外国人客数が初めて年間1000万人を突破した年となった²。2003年に「ビジット・ジャパン事業」が開始されてから10年目の節目の年に出た成果であった。

今後は、こうした海外からの観光客をどのように地方へ誘致するかが一つの鍵になってくるはずである。特に現在のところ、日本を訪問する外国人の6割が韓国、中国、台湾、香港からの観光客であることからみて、東アジアからの観光客をどのように呼び込むかが重要な課題となる。

図1-3は、経済企画庁が作成した西太平洋地域における局地経済圏を示したものであり、鹿児島はその地理的な位置から環黄海経済圏の一角をしめる。そして図1-4が、2012年10月段階での九州各県（福岡空港を除く）の空港における国際定期路線の就航状況を示したものである。福岡空港は別格とするとして、鹿児島は環黄海経済圏のソウル、上海、そして華南経済圏の台北との3つの国際定期便が飛んでいる唯一の都市であることが分かる³。台北との国際定期便は2012年3月に開通したばかりだが、同年11月の利用率が71%に達するなど好調を維持している。2012年の鹿児島空港発着の3つの国際定期路線の利用者が、11月現在で約8万7千人となり、利用者数は過去最多となっている⁴。国際定期路線が1便しかない大分（ソウルのみ）、熊本（ソウルのみ）、そして2便しかない長崎（ソウル、上海）、宮崎（ソウル、台北）とも比べて、環黄海経済圏および華南経済圏の3つの都市との定期路線を有する鹿児島の優位性は明らかである。南九州の空の玄関口として、鹿児島空港は有利な位置にある。

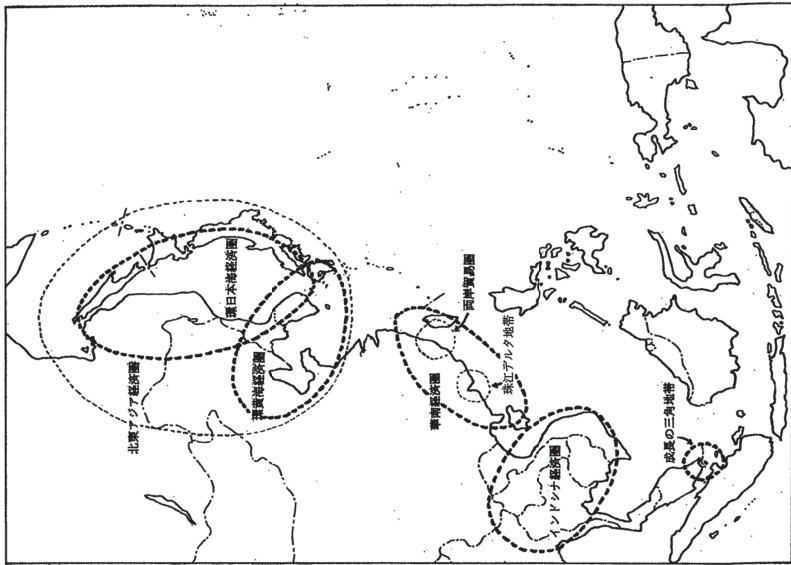
しかし問題は、その優位性が実際の外国人旅行者誘致に活かされているかどうかである。表1-1は、九州各県への外国人旅行者の延べ宿泊数を示したものである。これを見ると、平成24年は九州7県のうち、鹿児島での外国人旅行者の延べ宿泊数は最下位から2位という結果に終わっている。九州の他県と比較した場合、まだまだ鹿児島観光の伸びしろがあることを示している。

また本プロジェクトが開始された2011年2月は、1ヶ月後に九州新幹線鹿児島ルート全線開通を1ヶ月後に控えていた時期である。こうした状況を踏まえて始められたのが、「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」であった。開始当時のことについては、すでに中間報告書があるので、そちらを参照いただければ幸いである。

² http://www.mlit.go.jp/kankocho/topics08_000111.html [2013年12月21日閲覧]。

³ 2014年3月から香港－鹿児島線が就航することになっている。

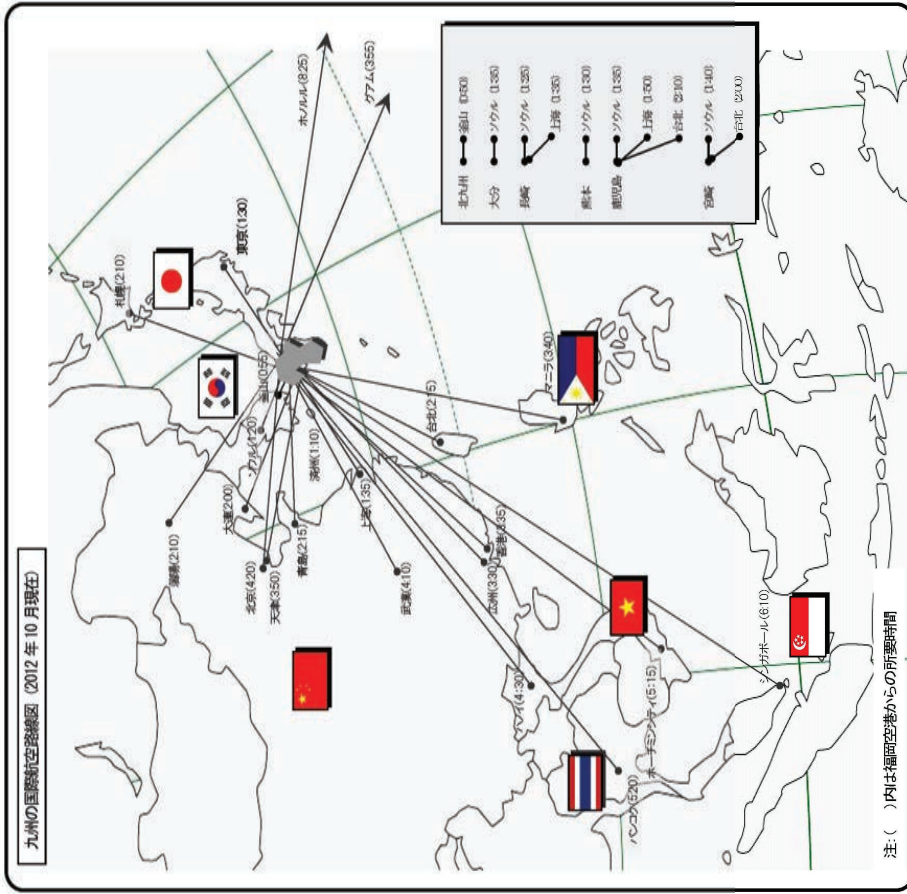
⁴ 『南日本新聞』、2012年12月11日7面。



出所) 経済企画庁『年次世界経済白書：平成3年：本編』第4章 市場経済の拡大と再編、第1節 西太平洋地域の分業の新たな展開、3 厚みを増す西太平洋地域の経済関係より。

<http://www5.cao.go.jp/keizai3/sekaikeizai/wp-we91-1/wp-we91bun-4-1-11z.html> [2012年12月18日閲覧]。

図 1-3 西太平洋地域における局地経済圏

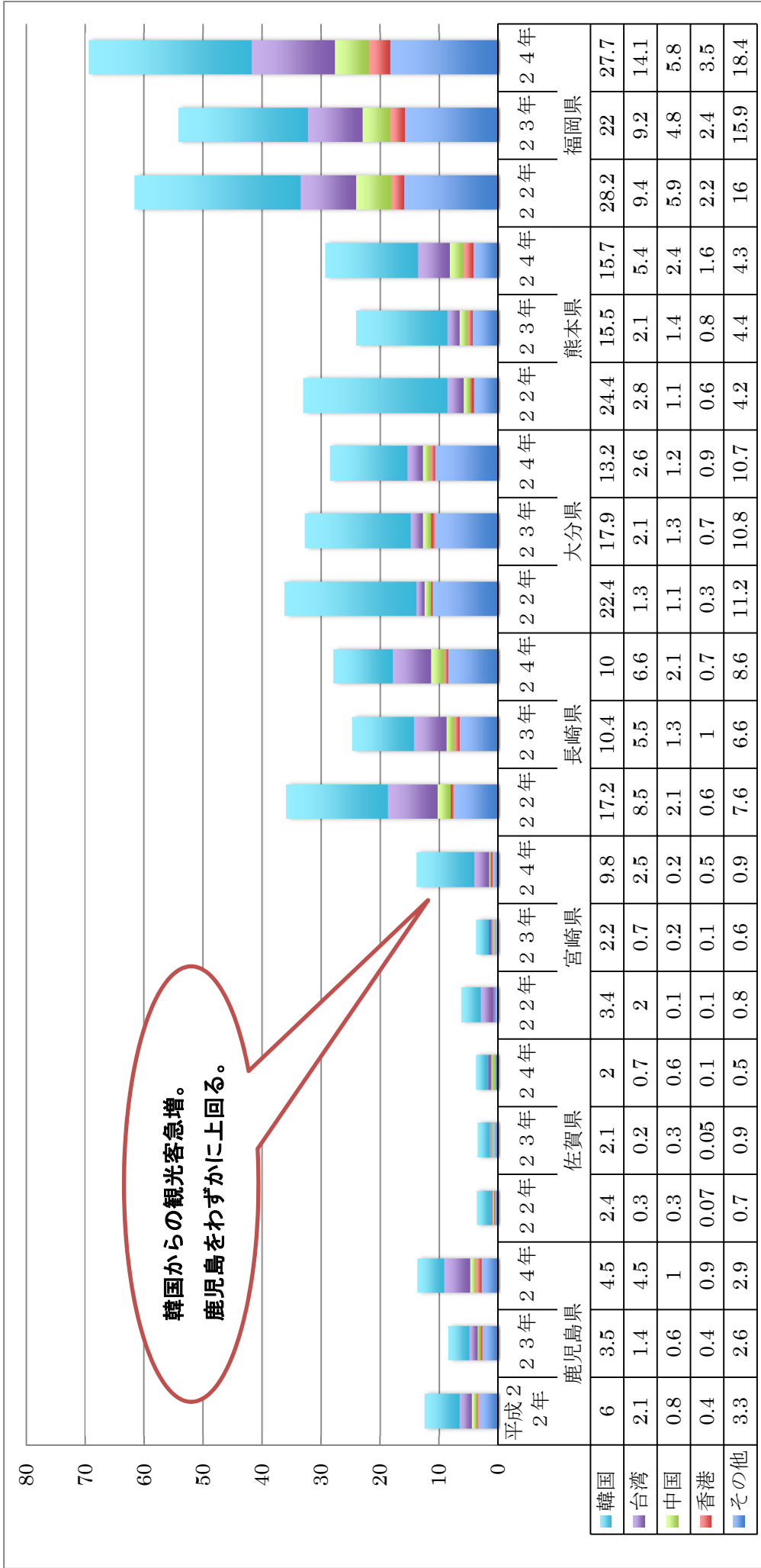


注：()内は福岡空港からの所要時間

出所) 九州経済産業局『九州経済の現状』2012年秋、1頁より。

http://www.kyushu.meti.go.jp/keiki/chosa/genjyo/genjyo_2012_aki.pdf [2012年12月19日閲覧]。

図 1-4 九州各県の国際定期路線



韓国からの観光客急増。
鹿児島をわずかに上回る。

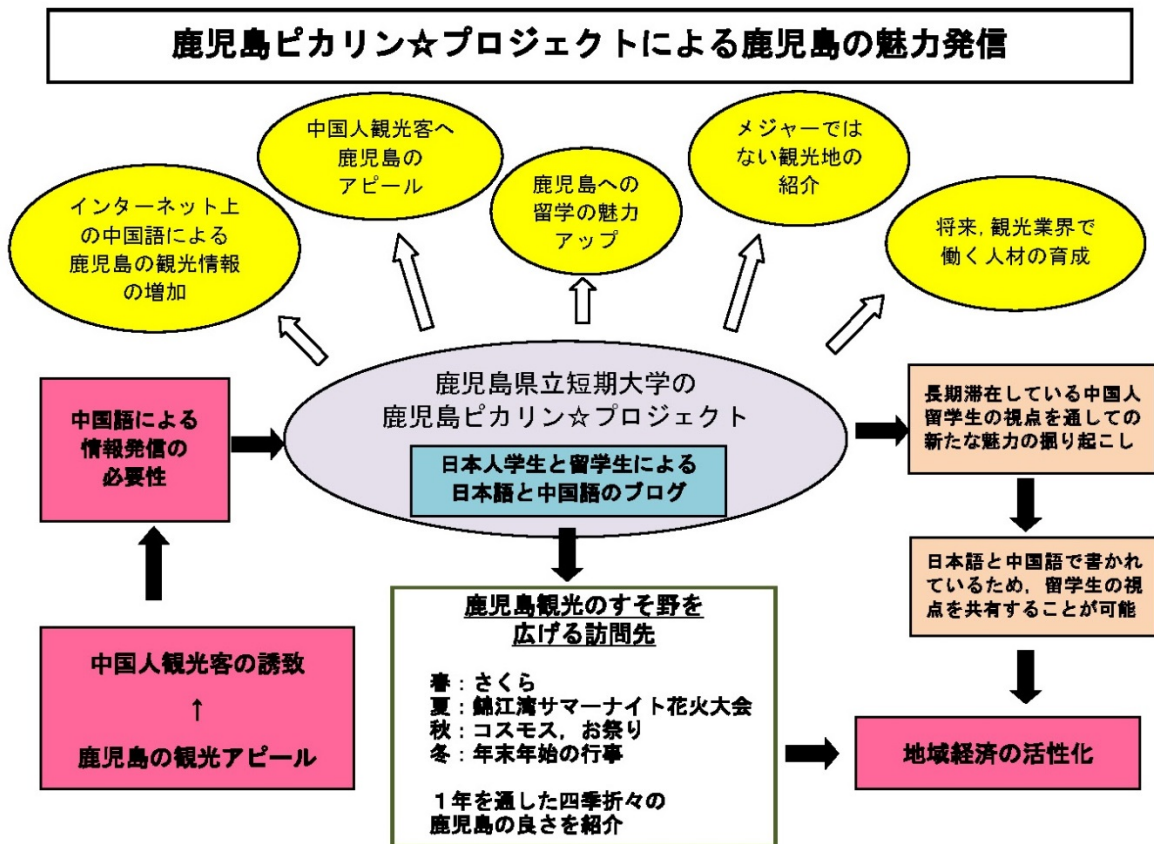
出所) 国土交通省観光庁参事官 (観光経済担当) 『宿泊旅行統計調査報告』の平成22年~24年度版を元に, 筆者作成。 (単位: 万人)

図1-5 九州各県における外国人延べ宿泊数

1-3 プロジェクト実施の目的

プロジェクト開始時に想定していた効果をまとめると以下の通りで、図にしたものが図 1-6 である。

- ①観光情報の量と質が変化する。情報量が増え、パソコンの検索サイトで情報がヒットしやすくなる。さらに、日本語や日本文化に深い関心を持つ長期滞在の留学生が、従来注目されることの少なかった情報や、四季折々に変化する情報を取り上げることで、情報の質的な変化が生じる。
 - ②ブログを通して、将来的に日本留学を希望する学生に対してより上質な情報を提供できる。
 - ③海外のマスコミが取材する際に、検索する情報が増加し、鹿児島県の観光についての番組を制作してもらいやすくなる。
 - ④将来、鹿児島県の観光業に携わる人材を育成することにつながる。鹿児島県で母国からの観光客を受け入れたり、母国に帰国後も魅力ある旅行プランを作成したりと、地元貢献する外国人の人材を地元で育成することができる。
 - ⑤日中の国際交流が促進される。まだ観光地化されていない場所を実際に訪れることにより、ありのままの日本を理解することができる。
 - ⑥日本人学生の地元理解が深まる。本学学生の大半が地元高校の出身であるがゆえに、地元の良さを看過していることが多い。留学生の視点を通じて、地元の魅力を再発見することができる。
 - ⑦大学の地域貢献活動。
 - ⑧新しい観光情報発信モデルを他地域に対して提供することができる。
 - ⑨留学生の増加、観光客の増加によって、地域経済の振興につながることを期待される。
- など、多くの効果が期待される。



出所) 筆者作成

図 1-6 「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」の概要図

第2章 プロジェクト報告

2-1 プロジェクトからのフィードバック

本プロジェクトでは、鹿児島県内の観光地をブログで紹介した。どのような観光地を紹介したのかは、直接ブログ「中国留学生眼中的鹿児島」(URLは、<http://kagochina3.sblo.jp>)をご参照いただくことにして、ここでは本事業の3年間の成果をまとめておきたい。主なものは、以下の通りである。

- ① 季節に応じた鹿児島の魅力を紹介できた。これは、半年から1年間滞在する留学生ならではであり、海外からブロガーを数日間招待する事業との大きな違いである。鹿児島の三大大行事にどの行事を入れるかは議論が分かれているようだが、「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」では、おはら祭り、妙円寺詣り、弥五郎どん祭り、錦江湾サマーナイト花火大会、六月燈、吹上浜砂祭りなどを紹介した。またお祭りではないが、毎年夏に行われる桜島納涼観光船もブログで取り上げた。秋に咲くコスモスは、漢字では「秋桜」と表記するため、漢字を理解する中国人留学生にとっては好評であった。



図 2-1 おはら祭り



図 2-2 妙円寺詣り



図 2-3 桜島納涼観光船に乗る留学生



図 2-4 錦江湾サマーナイト花火大会

- ② 離島の魅力。本プロジェクトでは、鹿児島の本土だけでなく、甕島、沖永良部島、種子島を訪問することができた。離島へは、主にフェリーや高速船を利用したが、飛行機とは違った旅程を留学生は楽しんでいった。さらに、中国人留学生のほとんどが内陸出身だったために、海岸にいただけで楽しんでいたのである。また中国の地図を広げると、中国の西には海がない。そのため中国では、海に沈む夕日を見る機会ほとんどない。その点鹿児島本土では、海に沈む夕日を見ることができ、これは意外に見落とされがち

な地理的な優位性である。さらに離島の場合は、海から昇る朝日を見て、昼は海岸で遊び、海に沈む夕日を見ることが出来る。離島の雰囲気も含めて、離島の評価は高かった。



図 2-5 種子島宇宙センター



図 2-6 沖永良部の昇竜洞

- ③ 鹿児島県の意外な魅力を発見することができた。当たり前すぎて見過ごされがちなことだが、日本語も中国語も漢字を使用する。こうした点を考慮した場合、「鹿児島」という漢字には意外な魅力が含まれている。中国人留学生に「離島」が好評だったことは上述した通りだが、「鹿児島」には「島」の漢字が使用されている。これを前面に打ち出すと、奄美群島や種子島、屋久島などの離島を抱える鹿児島県では、新しい魅力が開拓できるのではないだろうか。本プロジェクトで考えた、日本語と中国語の離島のキャッチコピーは以下の通りである。

- ・ 行こう鹿児島「島」へ
- ・ 鹿児島「島」には「島」がある
- ・ 鹿児島「島」キャンペーン
- ・ 鹿児島「島」キャンペーン
- ・ そのさきの鹿児島「島」へ
- ・ 「島」った、鹿児島「島」には、「島」があったのか！：あなたが逃した島三昧
- ・ 鹿児島「島」の魅力
- ・ Let's go 鹿児島「島」
- ・ Let's go 鹿児島「島」
- ・ ドリームアイランドin 鹿児島
- ・ Dream Islands in 鹿児島
- ・ We Love 鹿児島～島・しま・シマ～

資料 2-1 離島をアピールするキャッチコピー（日本語）の例

- ・ 鹿児島，人人点头称“岛” [鹿児島、人々が絶賛するわが島]
- ・ 鹿児島，千岛之国 [島の国、鹿児島]
- ・ 鹿児島到（岛），人也到，大家都到鹿児島 [鹿が来る、人も来る、みんなが来る鹿児島]

資料 2-2 離島をアピールするキャッチコピー（中国語）の例

- ④ やはり、鹿児島県の地理的な特性は中国人留学生から評価が高かった。桜島、錦江湾はもちろんのこと、指宿の知林ヶ島、砂蒸し温泉、吹上浜海浜公園、そして鹿児島には、きれいな湧水を利用してそうめんを食べる、「そうめん流し」がある。中国では生水を飲む習慣がなく、衛生上、生水で洗った野菜をそのまま食べられないため必ず加熱して食べる。中国人留学生にとって、「そうめん流し」のビジュアル的効果もさることながら、湧水の中にそうめんを入れて、それをそのまま食べるというのは初めての経験になる。豊かな湧水、それ自体が観光資源であることに気づかされる。オンリーワンの景観があり、温泉が豊富に湧き出でて、さらに豊かな湧水があること、これが鹿児島県の強みである。

沖永良部の青い海
鹿児島県立短大
交換留学生 孫水

先日、私は沖永良部島へ旅行に行きました。鹿児島県というと桜島や砂蒸し温泉が有名で、離島についてはほとんど何も知りませんでした。が、実際に観光してみましたが、実際に観光してみましたが、沖永良部はすばらしい観光資源が多くあることに気づきました。

まず、昇竜洞です。昇竜洞とは鹿児島県の天然記念物に指定されている大鍾乳洞のことです。地下水がサンゴ石灰石を溶解し、一滴、一滴のしずくがつくり出した大自然の彫刻を見ることが出来ます。

照明の下、きれいな石が輝いていて、ダイヤモンドが敷き詰められているのではないかと思うほどでした。とても神秘的な印象を受け、まるで別世界に行ったような気がしました。

そして、沖永良部の旅行で一番良かったのは、青いきれいな海を見られたことです。小さいころから海が大好きでしたが、私が生まれ育った地域には海がありませんでした。だから、今回、海を見ることができてとても興奮しました。ワンジョビーチや、田皆岬、ウシシ浜、フーチャーなどが異なった海の表情を見ることが出来ます。

私の鹿児島での留学生活もあと1カ月ほどで終わってしましますが、また、中国にいる家族と一緒に遊びに行きたいと思えます。

(鹿児島市)

資料 2-3 『南日本新聞』の「ひろば」(2013年12月8日5面)



図 2-7 指宿の知林ヶ島

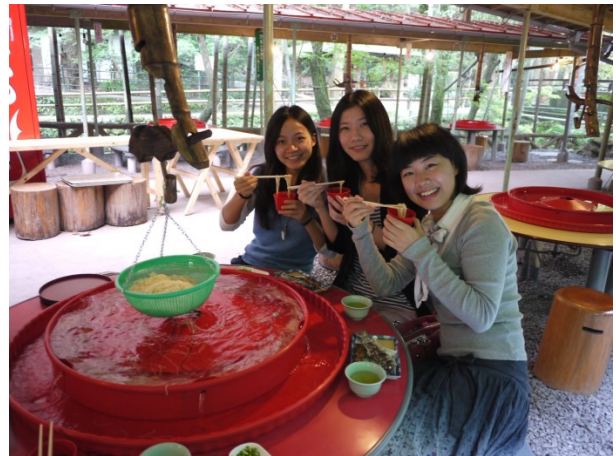


図 2-8 慈眼寺のそうめん流し

- ⑤ 和食がユネスコ世界無形文化遺産に登録されたが、鹿児島県はカツオ節の生産量が日本一であり、お茶の生産量は全国2位である。こうした特産品の産地を訪問し、生産の現場を実際に見学し、生産者から直接話を聞き取り、そして試食を含むさまざまな体験をすることは、外国人にとっても日本人学生にとっても貴重な体験となる。「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」では、枕崎市で行われた「いいふし(11月24日)の日ツアー」や南九州市で行われた「お茶いっぱいの日ツアー」などに積極的に参加してきた。各地で行

われる体験ツアーに鹿児島県内に滞在している留学生を積極的に参加させることは、結果的に鹿児島の魅力をアピールすることにつながるはずである。



図 2-9 南九州市のお茶畑にて
日本人学生も多数参加する



図 2-10 枕崎で「鯉船人めし」を食べる

- ⑥ 観光に関しては、多様な団体と協力する必要があること。本プロジェクトのコンセプトは極めてシンプルだが、実際に運営するとなると、予算の問題、観光地のリサーチ、観光地訪問の時間確保、そして現地までの移動手段や現地での移動手段の確保など、多くの問題に直面する。こうした問題は、大学の内部だけでは解決しにくい問題である。今回は、指宿白水館さんが中国人留学生と日本人学生を招聘してくれたり、NPO 法人きもつき情報化センターさんが大隅半島の観光地巡りを企画してくれたりした。こうした地域で、多くの団体と提携して地域の魅力を発信していくことが必要である。また今回、某県立高校が本学に大学訪問を行った際に、「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」の説明を行ったこともあった。こうした地域の高校とも繋がることができると、今後のプロジェクトの幅が広がっていくことが予想される。



図 2-11 想定されるプロジェクトの提携先



図 2-12 きもつき情報化センターさんの案内で大隅半島の観光地を巡る



図 2-13 高校生にプロジェクトの説明をする学生

2-2 未完のプロジェクト

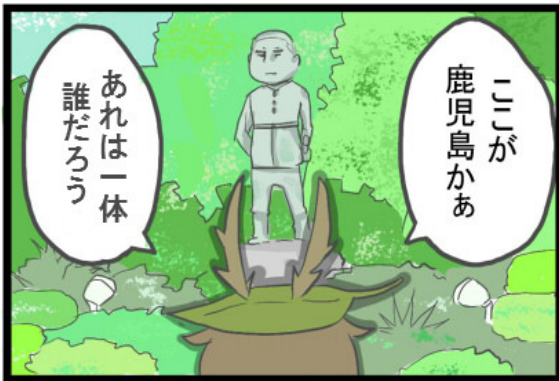
最近、各地でゆるキャラを作成して、そのゆるキャラとともに観光情報を発信することが行われている。しかしゆるキャラを作成する場合、着ぐるみの制作費用がかかり、しかもその着ぐるみがある場所では、その土地のことをアピールできない。しかも本プロジェクトが狙いを定めている、中国へのアピール度は低い。

そこで「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」では、マンガのキャラクターを作成し、そのキャラクターに日本語名と中国語名をそれぞれつけ、日本語と中国語でセリフを入れる四コママンガを作成した。キャラクターの日本語名は「しかりん」で、中国語名は「鹿宝（ルーパオ：しかちゃんという意味）」である。ストーリー設定としては、ある使命を帯びた中国生まれ中国育ちの鹿の王女が鹿児島を旅するというものである。このマンガをHP上にアップすることを考えていたのだが、最近の日中関係の悪化を前に、計画は頓挫してしまっている。図 2-14 が、しかりん・鹿宝のキャラクター説明図で、図 2-15 および図 2-16 が、未完のプロジェクトとなってしまったマンガの第一話と第二話である。

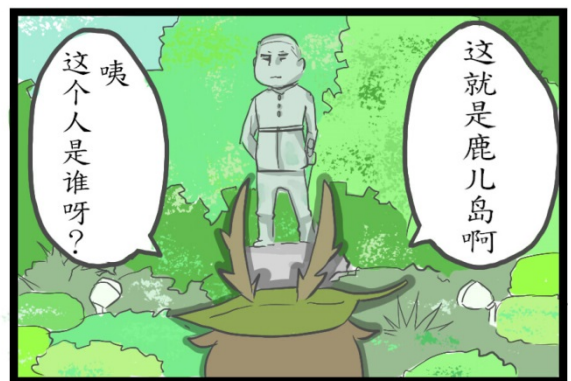


図 2-14 しかりん・鹿宝

しかりん鹿兒島にさすらう



鹿宝流浪鹿儿島



中国に住む「しかりん」は国の危機を救う為伝説の「アレ」を探しに鹿兒島に來たのだ!



來自中國的鹿宝為了救國于危難前來了鹿兒島尋找傳說中的那個“神秘東西”



お腹も減ったなあ…

でも「アレ」の情報はないし

大丈夫!?



肚子好饿呀

可是又没有那个神秘东西“的线索”

你没事好吧!?



よかったら私のかるかんを食べて!



不介意的話我的轻羹你吃了吧!!



图 2-15 しかりん第 1 話 (日中両言語)

ガイドのくろちゃん



つづく!!

导游小黑



图 2-16 しかりん第2話 (日中両言語)

第3章 多言語ブログ

3-1 簡体字と繁体字による情報発信

ブログに限らず、ウェブサイトを運営する際は、1つのページには1つの言語（もしくは英語ともう一つ）を用いるものとされている。閲覧者の用いる言語で作成する、という意味だが、文字コード（デジタル信号と画面表示する文字の対応表）の指定などシステムの運用が煩雑になるという理由もある。閲覧者の用いる言語が異なることが予想される場合は、通常、言語ごとにページを作成する（日本語ページ、英語ページなど）。

本プロジェクトは、日本語と中国語（簡体字）を段落ごとに併記している。また、2013年5月からは繁体字も加えることになった。簡体字は主に中国本土で広くされている漢字で、繁体字は台湾や香港など一部の地域で使用されている伝統的なタイプの漢字である。単語や表記法など一部違う（例えば、“パンダ”は簡体字では“熊猫”だが、繁体字では“貓熊”）が基本的には文字の書体が異なるものと考えていい。

[日本語]

皆さんもご存知のとおり、鹿児島県には薩摩半島と大隅半島の二つの半島があります。
ある晴れた日に、ずっと憧れていた大隅半島をたずねました。宝探しという名の下で、私達は大隅半島での冒険の旅を始めました。

[簡体字]

正如大家了解的那样，鹿児島是有萨摩半岛和大隅半岛这两个半岛的。在一个晴朗的日子里，我们探访了向往已久的大隅半岛。我们以寻宝的名义开始了这一天的探险之旅。

[繁体字]

正如大家了解的那樣，鹿児島是有薩摩半島和大隅半島這兩個半島的。在一個晴朗的日子裏，我們探訪了向往已久的大隅半島。我們以尋寶的名義開始了這一天的探險之旅。

簡体字から繁体字への変換はウェブ上の変換ツール（日中情報コミュニティサイト 簡体字・繁体字 変換ツール <http://www.jcinfo.net/jp/bigbg/>）を用いて、鹿児島県立短大の日本人学生がおこなっている。留学生が作成したコメントの簡体字をウェブサイト上に入力（コピーアンドペースト）し、変換ボタンを押せば、対応する繁体字が表示されるツールである（同様のサービスをおこなうウェブサイトは複数ある）。一つの記事が出来るまでのプロセスは以下の通りとなる。

- ① 留学生が県内各地で情報収集
- ② 留学生が中国語コメントを作成し、日本語訳をおこなう
- ③ 教員が日本語訳をチェック
- ④ 留学生が写真と共に、簡体字と日本語の併記の記事をアップ
- ⑤ 日本人学生が、簡体字を繁体字に変換し、記事に追加

中国本土の方も、台湾、香港の方も簡体字、繁体字の両方を読める人が多いが、より親しみが強く、ネット検索でもヒットしやすいという意味で、情報発信の幅が広がったといえよう。

3-2 アクセス解析の意義と手法

ウェブサイトを効果的に運用するには、どのページがいつ、どこ（IP アドレス=インターネット上の住所）から、どのような環境の端末（パソコンか携帯かの区別や OS やブラウザの種類など）から、どれぐらいの頻度でアクセスがあったか解析する、いわゆるアクセス解析をおこなうことが多い。閲覧の多いページはネット

上で高い価値を意味する。例えば、夜間にアクセスの多いページは仕事ではなくプライベートで閲覧されている可能性が高く、ページのデザインを親しみやすいものにするにより効果的になる。特定の国からのアクセスが多い場合は、その国に向けた情報をより充実させるきっかけにもなる。

本プロジェクトではさくらインターネットのレンタルサーバ(ライトプラン)のブログサービスを使用した。簡易型のアクセス解析ツールがあり、1日ごとに以下の項目の解析が可能である。

- ページ別：各ページの訪問者数，ページビュー
- 時間別：1時間毎の訪問者数，ページビュー
- リンク元：本ブログにアクセスする前（リンクがある）ページ
- 他に，アクセスした端末のOSやブラウザなど

高性能のアクセス解析ツールなら，アクセスした端末のIPアドレスなどの記録もとれるものが多い。

本プロジェクトでは2011年4月4日にブログを開設し，運用をおこなってきたが，今回は開設してから2013年12月までの2年9ヶ月の間のアクセスを月毎に集計した。集計項目は以下の4つとした。

- ① 訪問者数：アクセスがあった端末数
- ② ページビュー：ページのアクセス数（一つの端末でも，複数ページを閲覧したらその分をカウント）
- ③ リンク元（中国）：ブログにアクセスする前のリンクが中国のサイトであることがわかるアクセス数。
- ④ リンク元（台湾）：ブログにアクセスする前のリンクが中国のサイトであることがわかるアクセス数。

ホームページのURL（ホームページアドレス）は段階的な属性が含まれている。

例えば，鹿児島県立短大のURLは

<http://www.k-kentan.ac.jp>

であるが，このk-kentan.ac.jpの部分をドメインと呼ぶ。ドメインには「固有名」+「属性」+「国名」からなるccTLD（Country Code Top Level Domain）と「固有名」+「属性」からなるgTLD（Generic Top Level Domain）がある。ccTLDの場合，固有名と属性を合わせた（一つにした）汎用ドメインを用いることもある。例えば，aaa.co.jpならaaaという日本（jp）の会社（co）を，google.hkは香港（hk）のグーグルをあらわす。アメリカ合衆国は国名をあらわすusもあるが，インターネット発祥の地ということもあり，ccTLDよりもgTLDが使われることが多い（日本の首相官邸はccTLDのkantei.go.jpだが，ホワイトハウスはgTLDのwhitehouse.gov）。

表 3-1 ccTLD の仕組み

固有名	属性	国名（地域名）
	co（会社等）	jp（日本）
	ac（学校等）	cn（中国）
	ne（ネットワーク提供者）	hk（香港）
	go（政府機関）	tw（台湾）
	or（法人等）	to（トンガ）
	他	fr（フランス）
	他	他
固有名（汎用ドメイン）		他

例) k-kentan.ac.jp sblo.jp
 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
 固有名 属性 国名 固有名 国名

表 3-2 gTLD の仕組み

固有名	属性
	com（商業組織）
	net（ネットワーク用）
	edu（教育機関）
	biz（ビジネス利用）
	gov（米国政府）
	info（誰でも可能）
	他

例) biz-kpc.net
 ↓ ↓
 固有名 属性

今回のアクセス解析でリンク元が中国（上記③）だと判断したのは、(1)ドメイン末尾が cn もしくは hk のサイト、(2) 中国国内でもっともシェアの高い検索サイトである baidu.com、(3) 中国国内で多く使われるメッセンジャーサービスサイトである qq.com、(4) その他にリンク先を確認し簡体字であったサイト、以上4つの合計である。また、リンク元が台湾（上記④）だと判断したのは(1)ドメイン末尾が tw のサイト、(2)その他にリンク先を確認し繁体字であったサイトの合計である。ちなみに、まれにイタリアやカナダといった国からのアクセスも確認できた。

3-3 アクセス解析結果

本プロジェクトのブログのアクセス解析結果を以下に示す。まずはブログの訪問者数（図 3-1）だが、開設後、1,000 件ぐらいから徐々に上昇して、開設後 1 年で 1,500 件程度になった。2012 年 7 月から 8 月にかけて大幅にアクセスが増え、その後は 2,000 件前後を推移している。本ブログは、頻繁に日常的な記事を書くのではなく、週末や休暇中に観光地を訪ね、それを記事にしている。また半年ごとに留学生が入れ替わり、空白期間も 2 週間以上になることもある。このような理由で、更新頻度が高いとはいえないが（月平均 2.3 本の記事）、コンスタントに訪問者数が高いのは、過去の記事も閲覧対象となっているためと思われる。

過去の記事もじっくり閲覧されていることはページビュー（図 3-2）からもわかる。2013 年 7 月までは、概ね 3,000～4,500 回のページビューがある。1,500 件の訪問者に対して、4,500 回のページビューがあるということは、平均 3 ページを閲覧していることになり、検索などでたまたまアクセスしたが、他の記事は見ない、というパターンが少ないことを示している。さらに 2013 年 8 月からは飛躍的にアクセスが増え（図 3-2 右側）、同 10 月には 114,278 回のページビューがあった。同月の訪問者数は 1,874 件なので、実に平均 61 ページを閲覧している計算になる。今回のデータだけでは理由ははっきりしないが、訪問者それぞれが多くの記事を閲覧していることがわかる。

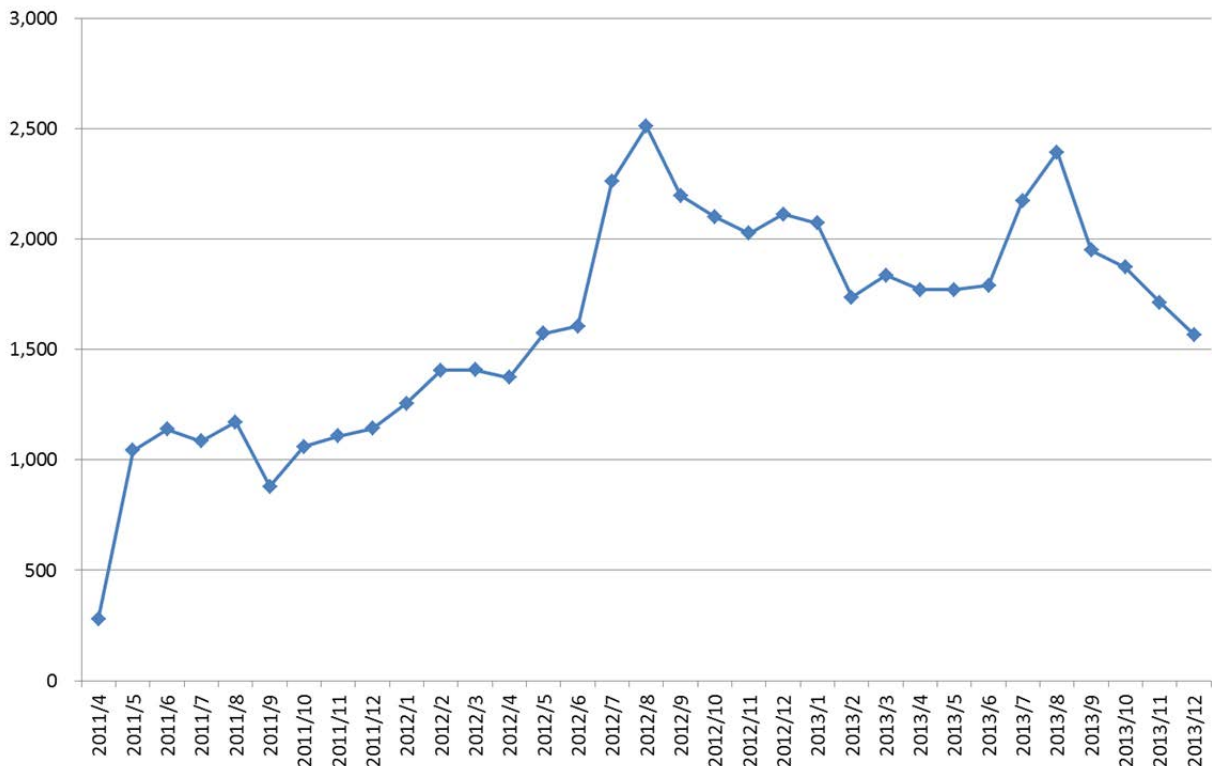


図 3-1 ブログの訪問者数（月別集計）

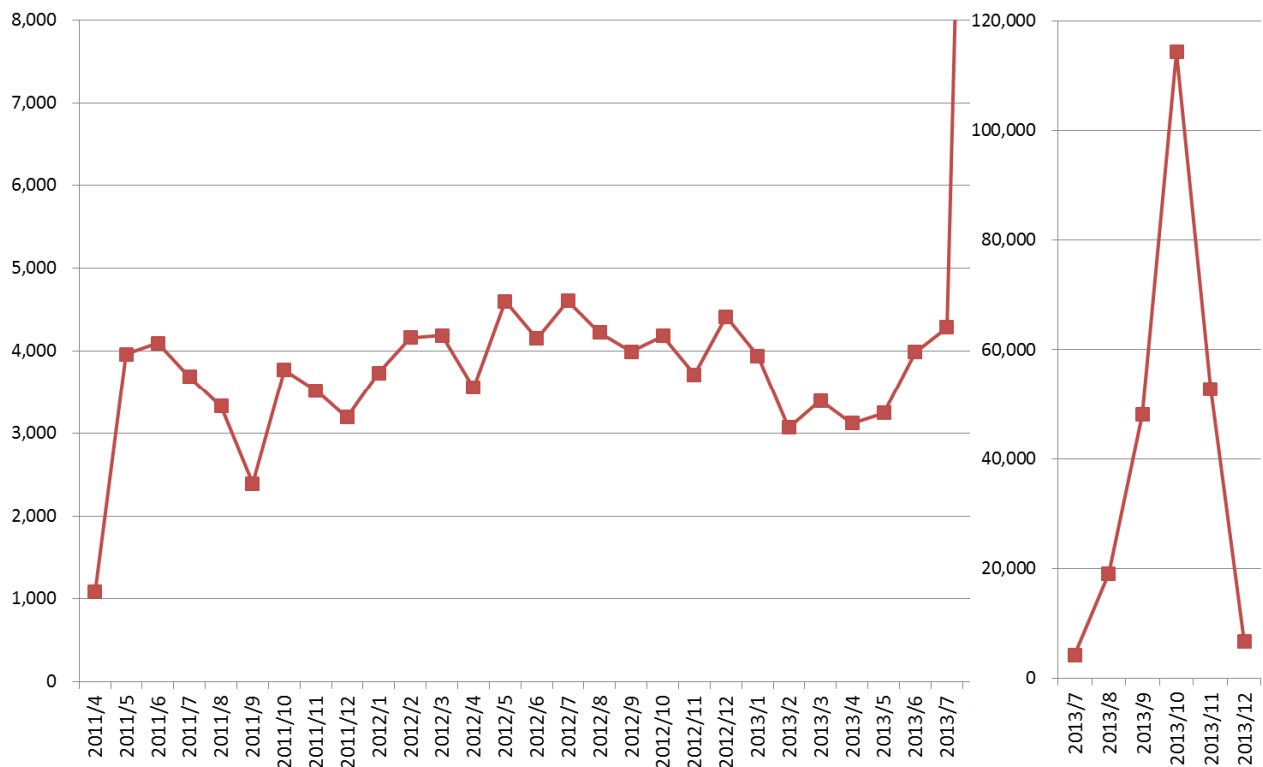


図 3-2 ブログのページビュー（月別集計）
 （2013/8 以降は件数が増えたため、軸目盛を調整）

次に中国や台湾のリンクからのアクセス数を図 3-3 に示す。これは中国（または台湾）のサイトのリンクから、本ブログにアクセスした件数である。すなわち、この件数の多くは検索サイトなどを経由した新規アクセスユーザーであると思われる。開設当初から中国からのアクセスは一定数あったが、台湾からのアクセスはほとんどなかった。しかし、2012 年 8 月に台湾からのアクセスが増え、その後はコンスタントに 20 件前後のアクセスがある。さらに詳細に解析すると 2012 年 8 月に <http://www.backpackers.com.tw/> というサイト（図 3-4）からのリンクが多く見られた。このサイトは台湾のバックパッカー（低予算での個人旅行）向けの情報サイトであり、ここに同月 9 日に本ブログが紹介されたためアクセスが急増したと考えられる（<http://www.backpackers.com.tw/forum/showthread.php?t=719254>）。その後はコンスタントに台湾からのアクセスがあり、2013 年 5 月から開始した繁体字の情報も役立っていると思われる。また、これは 2012 年 3 月に台湾－鹿児島線が就航し、図 3-5 に示したように、台湾からの観光客が急増したこともその背景であると考えている。中国からのアクセスは 2012 年 6 月以降減っていたが、2013 年 8 月のみ突如 90 件に上がっている。多くは中国の検索サイト baidu.com からのアクセスであったが、その理由は不明である。

今回のアクセス解析ツールではアクセスした端末そのものの地域がわからなかったため、中国や台湾からのアクセスであっても、端末のブックマーク（サイトの登録）から直接、本ブログにアクセスしたものなどは図 3-4 の件数に含まれない。実際の中国、台湾からのアクセス件数は、これを大きく上回ると予想できる。

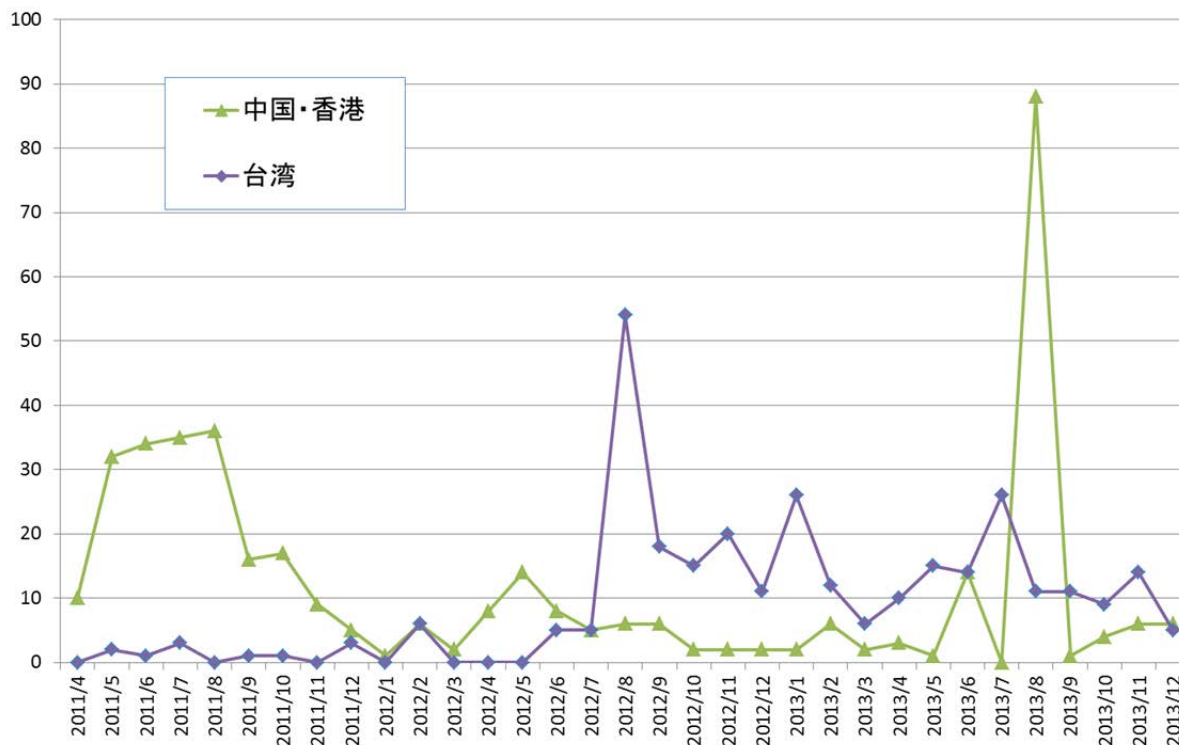


图 3-3 中国（香港含む），台湾のリンクからのアクセス数（月別集計）

The screenshot shows the website interface for backpackers.com.tw. At the top, there is a navigation bar with links like '首頁', '論壇', '攻略', etc. Below this is a search bar and a '國際訂房比價系統' (International Hotel Price Comparison System) section. The main content area displays a forum post titled '【景點】鹿兒島景點介紹' by user '胖小兔' (Pang Xiao Tu), dated 2012-08-09. The post discusses travel planning for Kagoshima. The right sidebar contains a '熱門搜尋' (Popular Searches) section with a search box and a '贊助連結' (Sponsor Links) section listing various travel-related websites like Agoda, Booking.com, and Hotels.com.

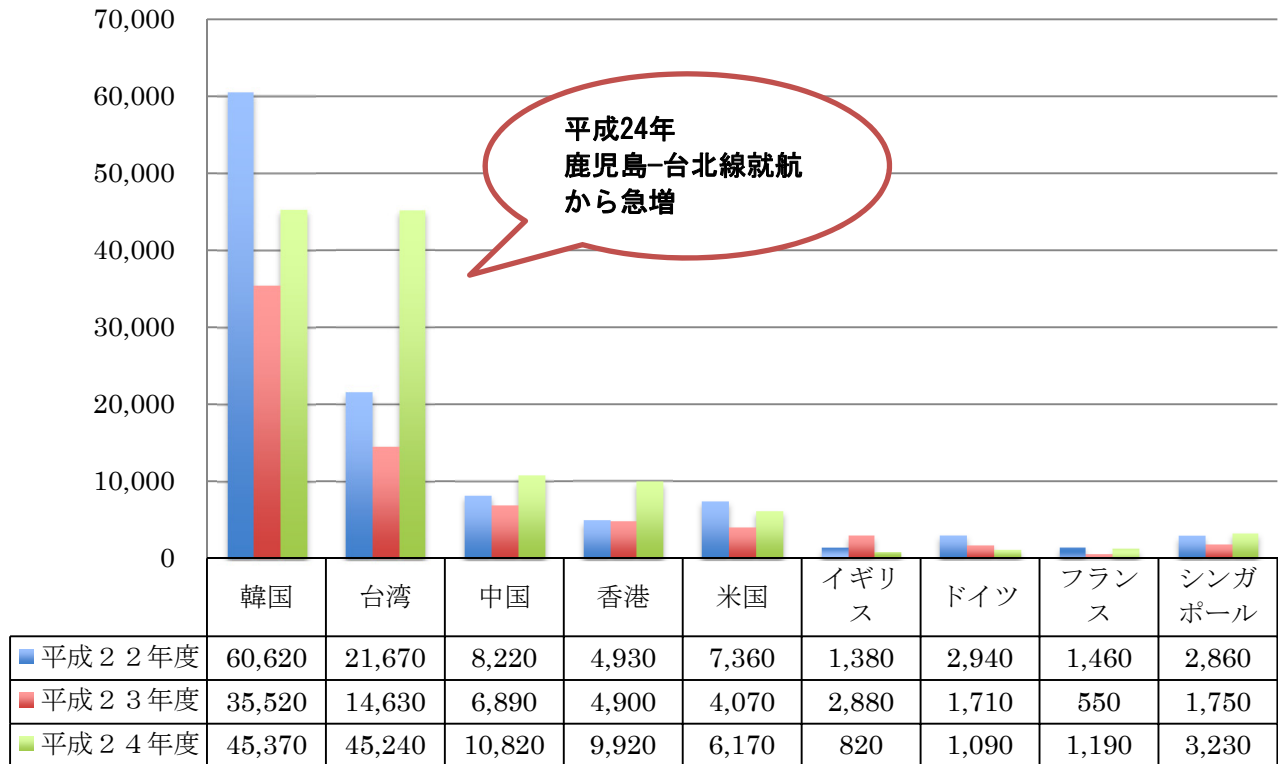
出所) <http://www.backpackers.com.tw/forum/showthread.php?t=719254> (2013年2月8日参照)

图 3-4 台湾のバックパッカー向けのサイト「背包客棧」

3-4 既存メディアと SNS

世界的なインターネットおよび携帯電話、スマートフォンの普及により、いつでもどこでもインターネットに接続し、検索をおこなうことが当たり前となってきた。2012 年のインターネット普及率は日本で 79.5%、中国で 40.1%、台湾で 75.4%となっており、全世界でも 34.3%となっている。近年のインターネット利用の大きな特徴は個人の情報発信である。ブログといった簡易情報発信に始まり、Facebook や Twitter, LINE といった情報交換型の SNS (Social Networking Service) が生活に入り込んでいる。インターネットを介しておこなわれる多種多様な情報とテレビや新聞といった既存メディアとの相互関係も無視できない状況である。既存メディアではカバーしきれない情報がインターネットでやりとりされたり、ネット発の情報を既存メディアが取り上げたり、逆に既存メディアが取り上げることで広く知らせるネット情報もある。本プロジェクトも数度、新聞の記事になったが、その際はアクセス数が大きく増えることが確認されている。また、上述のとおり、台湾の情報サイトで取り上げられることで本ブログのアクセス数が増えるといった、インターネット内での相互関係もある。個人でもブログ、Facebook、ツイッターなど複数の情報発信・交換手段を利用している事が当たり前になっているように、本プロジェクトのような地域情報発信も SNS など複数の形態を利用していくことが必須となっていくであろう。

ただし、海外への情報発信をおこなうには注意する点もある。例えばメッセージ型 SNS として日本で多く使われている LINE は他国ではあまり使われておらず、欧米では WhatsApp, 中国では WeChat などがトップシェアである。さらに中国では Facebook や Twitter などが政府の規制にかかっており、利用できない状況もある。本ブログも、設定ミスで Facebook のリンクを表示したところ、中国からはブログそのものが閲覧できないといったトラブルもあった。SNS といった新たな形態のネットワーク利用は各国とも過渡期にあり、発信対象などを考慮し、手段を選んでいくことが必要である。



出所) 国土交通省観光庁参事官 (観光経済担当) 『宿泊旅行統計調査報告』の平成 22 年~24 年度版を元に、筆者作成
 図 3-5 鹿児島県の国籍別外国人延べ宿泊数

⁵ Internet World Stats(<http://www.internetworldstats.com/>)

第4章 教育効果

本プロジェクトの柱は、鹿児島県の観光情報を日中両言語で発信することであり、日本人学生と中国人留学生と一緒に鹿児島県の観光地を回り、ブログで紹介することが主な活動である。この活動を通して、留学生の育成や、日本人学生の地元理解の深まり等の効果が想定される(1-3プロジェクト実施の目的 p.6を参照)。また、このメインプロジェクトと並行して、留学生の日本語スピーチコンテストの応援や、留学生の新聞投書の奨励なども行っている。さらに、プロジェクト発足2年目に、学生主導で留学生と日本人学生が日常的により密に交流できるよう、同じ構成員で国際交流サークルを立ち上げ、日常的な交流活動を続けてきた。これらの活動を通して、異なる文化背景を持つ日本人学生と留学生の間で国際交流が進み、また一緒に活動していく中で協同学習が生まれるといった効果も得られることが予想される。しかし、はたして想定していた教育効果は実際に得られたのだろうか。そこでプロジェクトに参加した中国人留学生や日本人学生にインタビューをして、プロジェクトに参加した感想等について聞いてみた。ここでは参加した学生たちの語りから彼らが得られた学びを報告したい⁶。

4-1 中国人留学生への教育効果

3年にわたり実施された本プロジェクトには、年間5名、計15名の中国人留学生が参加した。この15名の中国人留学生は南京農業大学で日本語を専攻している学部生(14名)と大学院生(1名)で、日本語学習歴は1年半～4年半とさまざまである。本学への留学期間は、11か月間が3名で、5か月間が12名であった⁷。

インタビューの結果、来日時の日本語能力や留学期間、参加した活動等の違いによって、本プロジェクトへの言及は留学生によって異なるものの、全員「いろいろなところに行けて楽しかった」と述べている。そのうち、留学期間中にもっとも楽しかったことや、印象に残ったことについて、「ピカリンに関連した活動」と挙げた留学生も複数いる。留学生の語りを分析した結果、中国人留学生への教育効果は、①日本語能力の向上、②日本社会や日本人への理解の深化、③自らの潜在的な能力への気づき、④自ら発信する意識の向上、と大きく4つにまとめられる。以下に留学生の発言(筆者による日本語訳)を引用しつつ、述べていく。

① 日本語能力の向上

本プロジェクトに参加した中国人留学生の主な活動は、鹿児島県の観光地取材し、日中両言語でブログを書くことである。中国人留学生は、見聞したことを写真とともに中国語と日本語でわかりやすく、かつ魅力的に伝えることが求められる。そこで留学生たちがまず日本語で表現することの難しさにぶつかってしまうことが予想される。留学生の語りからも、ブログを書くにあたり、まず自らの日本語力の不足を実感していたことが分かった。日本語表現力のなさをなげき、日本語に訳すときは苦しかったといちように述べている。しかし、ブログの執筆を重ねていくうちに、「だんだん難しくなくなってきた」「時間もそんなにかからなくなった」「スムーズに書けるようになった」と自らの成長を振り返っている。

⁶ インタビューは、本プロジェクトの教員1名によって行われた。当該教員は留学生教育担当の教員でもあり、留学生へのインタビューは帰国直前に行われ、留学生生活全般についての聞き取りを行った。一方の日本人学生の参加者に対しては、プロジェクト実施2年目の年度末に実施した。インタビューは、本プロジェクトに参加した感想等についての調査であると事前に説明した上で実施した。インタビューは当該教員の研究室で行われ、学生1人と1対1の場合もあれば、学生2、3人と座談形式で行われた場合もある。インタビュー開始前にICレコーダーで録音することの説明と、学生の発言を報告書などに使用することの説明を行い、了解を得たうえで録音をした。留学生も日本人学生も日常的に当該教員の研究室を訪れているため、比較的リラックスした雰囲気の中で雑談に近い形で行われた。分析はインタビュー内容のうち、本プロジェクトに関する発言のみを対象とした。

⁷ 帰国前のインタビューは、15名のうち、8名に対して実施した。留学生が話しやすいように、インタビューでは主に中国語を使用した。

また、本プロジェクトでは、ブログは、留学生の書いた文章を教員が添削して留学生に返却し、その後留学生本人がアップするという流れで行っている。教員の添削は、①ブログの質を保ち、一般の日本人が閲覧しても楽しめること、②より自然な日本語を示すことにより、留学生の日本語力の向上に資すること、という2点を意図していたが、その意図が留学生にも伝わっていた。教員の添削を確認した留学生は、中国語と日本語の表現の仕方や文体などの違いに気づき、自らの日本語の表現の間違ったところがわかり、それを直すことにより、不自然な表現が日本語らしい表現になることを実感できたと述べている。

そのほか、ブログを書くことのために、日本語で資料収集を行うこと、ブログで日常会話以外のやや複雑な日本語を実際に使ってみる機会が増えたことも教育的効果として挙げられる。

バスを降りたばかりで、南九州市のマスコットゆるキャラ「お茶むらい」が迎えてくれました。「あ、かわいい！」と言って、私たち留学生三人は「お茶むらいと一緒に写真を撮ってもらいました。o(≧▽≦)o」

●さんへ：日本では最近、マスコットという言い方はせずに、ゆるキャラと呼んでいます。「くまもん」とか、「ふなっしー」とかもゆるキャラです。あと南九州市のゆるキャラは、「お茶むらい（おちやむらい）」です。

接着我 便来到了茶 教室， 切的茶 老 我 介 了茶叶的基本知 ，茶具、泡茶的方法、泡茶的注意事 等， 自示范教我 怎 泡出一 美味的茶。

私たちが最初に参加したのは、最初来たところはおいしいお茶の淹れ方教室です。やさしい日本茶インストラクターさんから、お茶の種類、茶器、土煎煎茶のおいしい淹れ方とその注意点を細かく紹介してばかりでなく、もらいました。そして、実際に、私たちにおいしいお茶の淹れ方をステップバイステップで実演していただきました。

接着便是自己 自泡茶品茶的 。看了 才老 的示范，并在 固 工作人 的 切指 下，我 品着自己泡的茶，陪着日本 小点心中， 有一番 味。中国也是茶 叶大国，日本的茶与中国的茶相比，叶 、味 、色深， 体 着日本 的茶道之美。

次は、自分でお茶を淹れとお茶飲みの時間が淹れる番です。先日本インストラクターさんが実演してられたようにお茶を淹れてみました。淹れ方を見て、私たちが模倣して始めて日本のお茶を淹れてみましたのはこれが初めてでした。親切な茶業女性の指導した上で、スタッフの女性が教えてくれたので、おいしいお茶ができました！おいしそうでしょう～自分が淹れたお茶を飲んで、お菓子のおせんべいを食べて、最高だと思いました。

中国もお茶の大国ですが、日本のお茶は中国に比べて、お茶の葉が細々になってより細かくて、いろ色が深く、味がちょっと濃いと感じています。少し濃い感じがします。小さいお茶一杯が日本の茶道精神が含まれています。

茶道精神有六点，分 别 是：招待之心、 静 静寂、缺陷之美、一期一会、和気清寂和茶禅一味。 精神另作 中国人的我也 之敬佩和感 。

茶道精神を六つのキーワードでまとめてみました。①おもてなしの心、②侘び寂び、③不完全美への傾倒、④一期一会、⑤和気清寂、⑥茶禅一味という精神は、中国人の私にとって、深く感心されていました。どれも興味深いものでした。

品完茶后我 来到了 自揉茶制茶 。揉茶是指 在 40 度 到 50 度 的 焙 炉 上，用 手 反 复 揉 开、揉 碎、揉 搓 茶 叶，使 茶 叶 本 身 的 水 分 蒸 发 ，是 最 后 烘 干 前 的 一 个 重 要 步 骤 。看 着 我 自 揉 成 的 茶 被 烘 干 后 被 分 成 小 包 再 回 到 自 己 手 上，一 种 自 豪 感 油 然 而 生。

次はお茶の手揉み体験の時間だよ。お茶の手揉みは焙炉と呼ばれる40℃から50℃に加温された台の上で、手で茶葉をほぐす、こねる、揉むなどの作業を行って乾燥させながら煎茶に仕上げてゆくということ。最後にできあがったお茶は小包ごとにつめられて、プレゼントとして私たちに贈ってもらいました。プレゼントされました。自分が揉んだお茶を飲むのはなんてうれしいだろう。^C^o^o^

看着 些小点心中是不是很美味呢？他 全部是由茶叶 原料一制而成的哦。我最喜 欢的是抹茶布丁，抹茶色的布丁上盖着 豆泥，不 外形可 爱， 品 色，一 股 茶 的 清 香 与 豆 的 甜 味 交 叉，在 唇 舌 间 游 离 开 来。

こちらの写真の料理はおいしそうでしょう。これらの料理には全部、お茶が使われているよ！全部お茶を原料の一つとして作られているよ！私が大好きなのは抹茶プリンです。抹茶色のプリンのうえ、小豆の餡餡(あん) がかけてあって、あんはあんをあんとしていて、あんだけだけであんがあんそう。(^^) ちよっと食べてみて、抹茶のすがすがしい香りと小豆の甘さが交わって、そして口中で離れていって、おいしかったです！

才的小点心一下子勾起了我的食欲，当然 也指向了午餐 。当打开盖子的 一瞬，我 都 出了 “啊” 的惊 声。看着 色 色 丰 富 养 分 均 衡 的 豪 华 午 餐，我 便 赶 快 大 快 朵 颐 起 来。

さっきのお茶料理を試食したら、おながすてきました私の食欲を誘ってきて、おながすてました。そろそろランチタイムだよ！お弁当のふたを開けた瞬間、「あ！おいしそう(swo)」とみんな感嘆しました。この豪華で、栄養バランスの豪華満点のランチの好意を無駄にしないように私たちはいっぱい食べました。

再向上一段便来到了茶寿台。茶寿是108的称，在108台上，每个重要的数都会刻上一句，比如四十是“四十不惑”。拾而上，一反思自己走的人生，一憧憬着未来，我怀着崇敬的心情小心地走着每一步。到达山顶眺望的美景竟然有点感人了。

十一月秋高气爽的日子里从展望台眺望，美景尽收眼底。而是池田湖和鹿儿 湾碧波，西面是开山起伏，山脚有南撒台地一望无，此刻此景，以言表。深吸一口气，大自然予美景的鹿儿 湾一声感。

ちよっと上に行くと、茶寿階段に着きました。茶寿とは数え年で108歳のお祝いのことです。108段上がる途中、節目の年には言葉が刻んであります。たとえば、四十歳は不惑四十にして迷わずという意味です。人生を振り返りながら未来を夢見ながら、一段一段ゆっくり上がるという信念を持って私は登っていききました。頂上にとどまらず先に広がる景色を見たとき、深く感動されました私はすごく感動してしまいました。

十一月の晴れた日の展望台からの眺めは、本当に素晴らしいものでした。東方には池田湖や鹿儿島湾が青々と水を湛え、南方には開開岳の山々が連なって見えました。

図 4-1 ある回のブログを添削したもの

まず、留学生Bの語りをみよ。Bの語りでは、書くことの難しさが繰り返されている。中国語を日本語に訳すことの難しさ、直訳ができないこと、日本語での表現力の不足が述べられている。しかし、同時に、留学生自身もブログを書くプロセス及び教員の添削から、普段の授業等ではできない体験が得られたと認識しているようである。また、Bの発話から、ブログの執筆において、Bは日頃見たり聞いたりしてインプットしていた日本語を積極的にアウトプットするよう意識して使い、その表現の適切さなどを検証していることも推察された。さらに、ブログというインターネットでの文章における文体の日中間のとらえ方の違いへの気づきもあったことが窺われた。

【留学生Bの発話】

ブログを書くのが大変だったけど、勉強にはなりました。中国語を書いて、日本語に訳していたけど、訳すのが難しかったです。中国語の語彙や表現が豊富にあるのに、日本語に訳すと・・・中国語では言葉一つで伝える情報がたくさんあるのに、日本語となると、どうもつまらなくなります。日本語の勉強になりました。中国語の表現をそのまま日本語に訳したら、わからないと言われたりします。中国語にあって日本語にもあると思った表現は実際には存在しないこともたびたびありました。「〇〇」のブログを書いた時も、どこかで読んだことがあると思った表現を使ってみたが、通

じませんでした。先生の添削で、自分が書いた日本語で、どのような表現が実際には使われていないもので、どのような表現があまり良くない表現だというのがわかり、勉強になりました。また、文体の違いもあります。ブログは日記のようなものだと思います、常体で書いたら、敬体を使うべきだと指摘されました。中国語だったら話しことばなので、日本語でも敬体ではなく、常体で話し言葉で書くのだと思っていました。

[注：引用文中の下線は筆者によるものである。以下同じ。]

留学生Cも書くことの難しさを述べているが、添削に対して決してネガティブにとらえているわけではないことを「いやだと思ったことはない」と表現している。日本語の作文力が上がったという表現は使われていないが、「叩かれれば叩かれるほど伸びるタイプ」と自己分析をしているところから、教員の添削は日本語力向上の手助けであると捉えていることが推察される。

また、留学生Gの場合、「なるほどこういうふうに表示するのだ」と添削により日本語の自然な表現に触れることの喜びを語っている。

【留学生Cの発話】

ブログを書くのは難しいです。〇〇先生が赤をいっぱい入れてくださったので、自分の日本語が本当に下手なんだと思いました。しかしいやだと思ったことはありません。それでどこが間違っていたかわかるから。私は、叩かれれば叩かれるほど伸びるタイプです。褒められるばかりではかえって進歩がないと思います。

【留学生Gの発話】

回数を重ねていくと、ブログも長く書けるようになり、また難しくなくなってきました。自分が思ったことを書けばいいのだということがわかりました。〇〇先生の添削と比べてみて、なるほどこういうふうに表示するのだといろいろ勉強することができました。やはり自分の書いたものは中国語を無理やり訳した不自然さが残ることもわかりました。

留学生Eもまた「書くことが苦手」から語りだしている。Eは具体的にブログを書くためにかかった時間がだんだん短くなったことを挙げて、作文の能力があがったと実感したことを述べている。

【留学生Eの発話】

日本語が下手で書くことが苦手です。以前中国にいた時、400字のものを書くために図書館で7-8冊ぐらいの参考書を借りていました。このブログを書くようになって、最初は1篇に4晩ないし、5-6晩かかっていたが、今では2晩ぐらいで書けます。作文の能力が上がったと思います。

以上見てきたように、日本語でブログを書くことは、中国人留学生にとって大きな挑戦であり、非常に困難な作業だと言える。しかし、本プロジェクトに参加した留学生全員がそれをポジティブに捉えていたこと、特に教員の添削を、より自然な日本語の表現の習得のためのリソースとして利用できることを認識していることが明らかになった。

② 日本社会や日本人への理解の深化

前述したように、本プロジェクトの参加者の中国人留学生は、5か月ないし11か月の短期交換留学生である。1～2学期間の短い留学生活において、日本社会および日本人を深く理解することはかならずしも容易なことではない。語りから、日本人学生と一緒に鹿児島の観光地を回って活動していく中で、鹿児島のことをより広く深く知ることができ、さらに活動を通して日本人学生との人間関係も構築されていることが推測される。

まず、鹿児島への理解の深化について、留学生Dの語りを引用したい。Dは、本プロジェクトを通して鹿児島のことを深く知ることができたと述べており、またより積極的に理解しようとしていることが推察される。

留学生Dは「平成24年度アイランドキャンパス」に参加し、本プロジェクトの教員および日本人学生、留学生と沖永良部島を視察した。学生たちは、訪問地の役場で、プロジェクトの活動及び観光についてのプレゼンテーションを行った。離島の観光資源のPRに学生ならではの視点を提供するため、学生たちは事前に沖永良部の観光資源を調べていた。Dは、事前の調査等で得られた知識と、実際に訪問してみた現地の様子を結び付けて、沖永良部の赤土からその土地の農業の発展ぶりを推測している。

【留学生Dの発話】

私たちの活動の目的は鹿児島をPRすることですが、この活動を通して日本のことを深く知ることができました。沖永良部に行ったとき、知名町の赤土等を見て、ああここは農業がかなり進んでいるだろうなと思いました。先生が特に説明していませんでしたが、私たちには新鮮でした。

沖永良部の地理についても勉強しました。奄美群島はハブが出没するが、沖永良部にはハブがないのは、石灰岩があるからだと資料などを調べて分かりました。だから農業が発達していると思われます。

活動を通して成長できまし、いろいろ見られましたし、世界が広がりました。大学、宿舎だけの生活ではなく、いろいろ見ることによって視野が広がりました。ピカリンがなければ、そんなにたくさんのおところに行けなかったと思います。

短期交換留学生として来日した場合、往々にして大学と寮を往復するだけの生活を余儀なくされる。Dはいろいろ見られて世界が広がったと表現しているが、彼女の場合、それはただ見せられたものを見ただけではなく、自らも積極的に見て吸収しようという意識が働いていたのではないだろうか。



図 4-2 お茶会に参加する留学生



図 4-3 浴衣体験した留学生と日本人学生

また、本プロジェクトの活動を通して、中国人留学生は日本人学生と交流を深め、良い人間関係が構築されていくことも窺われる。

留学生Aは参加した日本語スピーチコンテストでの経験を語った。鹿児島では、毎年1月に鹿児島国際交流協会の主催で「鹿児島で世界を語ろう—外国人によるスピーチコンテスト」が行われている（図4-6、4-7）。本学も後援団体の一つであり、本学の留学生は毎年参加している。本プロジェクトでは、留学生のスピーチコンテストへの参加をブログと同じく社会への積極的な発信のツールの一つと位置づけ、毎年応援活動をしている。具体的には、スピーチの内容を一緒に練り上げること、日本語の添削をすること、スピーチの練習会を開くこと、スピーチコンテスト会場での応援などが挙げられる。留学生Aはスピーチコンテストの練習を手伝ってくれた日本人学生の献身的な働きぶりを次のように語っている。

【留学生Aの発話】

スピーチコンテストの時、彼女は手伝ってくれました。教室で練習して、彼女が一文ずつ発音の手本を見せてくれて、私がそれをリピートして練習しました。私が声を大きく出せるように、私は教室の最前列にいて、彼女は教室の最後列に立って、二人で練習していました。その時はすごく感動しました。本当に献身的だと思いました。私に時間を使って付き合ってくれて。その直後にアルバイトがあるのに。その後も何回か食堂などで練習を手伝ってくれました。スピーチの暗記を手伝ってくれました。その後はすぐまたアルバイトに行くという感じでした。本当に献身的でした。だって彼女には大事な休み時間がほとんどなくなってしまうから。

また、留学生と日本人学生の交流は大学内にとどまらず、日本人学生の家族や地域へと広がりを見せている。プロジェクトに参加した日本人学生のアレンジで、鹿児島のおぎおんさあ（祇園祭）でおみこしを担いだり、週末やお正月には日本人学生の家に泊まりに行ったりすることも語られている。横田（1991）⁸では、外国人留学生にとっての日本人との間に心に残る深い出会いの重要性が指摘されているが、本学の留学生は大学が提供した公舎に入居しているため、ホームステイのような形で日本人と日常的に接することができないものの、こういった季節のイベントへの参加や、日本人の家に宿泊することは、より深い出会いにつながり、日本社会や日本人への理解を深めることにつながるだろう。

留学生Fはインタビューの冒頭で留学生活の全体的な感想を求められ、まず鹿児島の人々の優しさに触れている。本プロジェクトは、発足後2年目に留学生と日本人学生が日常的により密に交流できるよう、国際交流サークルを立ち上げた。サークルの構成員はプロジェクトと同じであり、サークルでは学生主導で活動している。Fの発話から、本プロジェクトがきっかけで日本人学生やその家族との交流を深めている様子が窺える。また、ここでは、「〇〇はほかの日本人と違っていました。中国人みたいです。」との発話に注目したい。この発話から、Fには、あらかじめ日本人像というものが存在していることがわかる。しかし、実際には、その日本人像ではくれない日本人も存在し、Fはそれを中国人みたいと表現している。Fは、「日本人」「中国人」のように「国」でくくって語るステレオタイプのなとらえ方をしていたかもしれないが、実際に日本人と接してみたら、日本人らしくない日本人、または自国の人と変わらない日本人がいることに気づきはじめた。日本や、日本人への深い理解は、このような多様な日本人に出会うことからはじまるのではなかろうか。

【留学生Fの発話】

こちらのみなさんは本当に優しすぎます。特に国際交流サークルのみなさん。感動しました。いつも私たちのことを考えてくれています。いたれりつくせりです。来て最初の週末は、〇〇ちゃんたちと仙巖園に行きました。次の週末は〇〇と〇〇子と天文館や、照国神社など。〇〇はほかの日

⁸ 横田雅弘（1991）「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105（5）、pp. 629-647.

本人と違っていました。中国人みたいです。本当に優しくてなんでも私たちのことを考えて、いろんな安いところにつれていってくれたりして。〇〇のおかさんもすごく優しいです。お泊りに行ったときは、車で迎えにきてくださって、帰るときは、お土産にお米やインスタントラーメンなどをもらったりしていました。時々ケーキをくれたり、靴下をくれたりしていて、本当に優しい方です。

③ 自らの潜在的な能力への気づき

本プロジェクトでは、留学生による情報発信をブログだけではなく、スピーチコンテストや、新聞への投書等さまざまな形で行っている。これらの活動への参加を通して、留学生は多くのことを学んだ。前述した日本語力の向上にとどまらず、留学生のメンタル面への働きかけもみられた。インタビューでは、複数の留学生が自信を持ちチャレンジしてみることの大切さを学んだと述べている。

留学生A、F、Eは口を揃えて最初は参加したくなかったと語っている。スピーチコンテストに申し込む時点では留学生AとEは来日9か月目だったが、Fはまだ3か月目だった。まず日本語力に自信が持てなかったからだと思われる。また、3人とも性格がおとなしく、母語ですらスピーチ等大勢の前で話した経験がなかったという。しかし、本プロジェクトの教員や学生のサポートを受け、3人とも非常に良い体験ができたと語る。

また、留学生AとEは予選が通過できず、本選に出場した留学生Fも期待していた優秀賞を獲得できなかった。3人とも満足いく成績を取めたとはいえず、やや残念な結果となっている。しかし、「やればできる」、「失敗の体験もいい経験になる」、「もう自分に消極的な思い込みをやめよう」といった言葉から、彼女たちは、スピーチコンテストへの参加を機に、それまでの積極的になれなかった自分から、より自信を持って積極的になろうという自分自身の変容に気づいていることがわかる。また、それは、結果よりも努力のプロセスを重視し、そのプロセスからも学ぶことが多かったと捉えるようになったことが示唆される。

【留学生Aの発話】

最初は逃げたい気持ちでいっぱいでした。中国の友達にスピーチコンテストに参加すると言ったら、みんなびっくり仰天。「君にスピーチコンテストなんて信じられない。似合わない」と言われましたよ。たぶん私の性格から、それまでの私なら絶対にありえないと友達が思ったのでしょう。

やはりやってみなければわからないものだと思います。チャレンジしてみることが大事だということを学びました。スピーチコンテストも実際に参加してみたら、とてもよかったと思いました。普通の私なら、「やりたくない」のところまでストップしてしまいます。



図 4-6 留学生のスピーチのブレイン
ストーミング



図 4-7 スピーチコンテスト 優秀賞受賞

【留学生Fの発話】

参加したくなかったです。しかし、参加してよかったと思いました。優秀賞は取れなかったけど、大勢の前でスピーチをしたのが初めてで、収穫は大きかったです。肝試しになったし、大勢の前でのスピーチが最も大きな収穫でした。練習のために先生方が日本語の発音を直してくださいました。直して下さった発音は、たぶんこれから一生間違わずにずっと覚えているでしょう。

【留学生Eの発話】

本選⁹に行けなかったけど、自分としては大きな収穫がありました。中国語ですらすスピーチしたことがなく、できないはずなのに、日本語でしました。非常に良い経験でした。成功体験はもちろんいいことですが、失敗の体験も良い経験になります。そういう機会があってよかったと思います。最初は参加したくないと思っていましたが、先生に言えなくて、しかたなくて申し込んだのです。

スピーチコンテストの経験から、もう自分に消極的な思い込みをやめようと思いました。もう消極的になるのをやめて、自分に自信を持つように思うようになりました。

また、留学生Gは、南日本新聞の「ひろば」への投書について次のように述べている。

【留学生Gの発話】

自分の文章、たとえば南日本新聞への投書とかをみて、私にもここまでできるんだ、このような潜在的な力があるとは思いませんでした。両親にもブログなどを見せました。両親はそれを同僚などに見せたりして、かなりわたしのことを自慢してくれていたと思います。もちろん日本語の部分はわかりません。写真や中国語は読めますからね。ピカリンは「収穫大」ですね。

<p>日本の料理支える 鹿児島県立短大2年 李 東輝</p> <p>11月24日は「いいふしの日」でした。「ふし」とはかつお節の「節」のこと。「いいふし」とは「良いかつお節」の意味です。かつお節生産日本一の枕崎市が、今年から制定した記念日で、それに合わせて体験ツアーがあり、私も参加してきました。</p>	<p>このツアーは中国人の私にとつて、はじめての経験ばかりでした。当日、私たちは枕崎のボランティアの皆さんに熱く歓迎されました。私は日本料理のだしはかつお節で取ることがはじめて知りました。このツアーではじめて本物のかつお節を目にして、そして、削り器でカツオを削り、だしの取り方を学ぶことができました。</p> <p>さらに、「ぶえん鯉」と</p>	<p>いう生のカツオをご飯の上のせて、自分で作っただしをかける「枕崎鯉船人めし」も食べました。「船人めし」は、漁師さんたちが船の上で食べたご飯をアレンジしたものです。だしだけでも、ぶえん鯉だけでもおいしいのに、これをミックスしちゃうなんて、さすがかつお節の本場、枕崎です。とてもおいしかったです。</p> <p>かつお節がなければ日本料理もない、枕崎のかつお節が日本の料理を下支えしている。そのことを学んだ一日でした。(鹿児島市)</p>
--	---	---

資料 4-3 『南日本新聞』の「ひろば」
(2012年12月22日5面)

⁹ 当該スピーチコンテストは、毎年1月の第二土曜日に予選を行い、参加者のうちの10人を選抜し、その10人が翌々週の土曜日に行われる本選に出場するという仕組みになっている。

④ 自ら発信する意識の向上

本プロジェクトでは、中国人留学生在が日中両言語を用いて執筆するブログを通して、鹿児島県の観光地を日本および世界にPRしている。想定している読者は日本国内外の中国語話者と日本人の両方である。

これまで、留学生と地域の関わり方は、地域交流活動と称される小中学校における国際理解教育での留学生の母語・母文化の紹介や、市民向け外国語教育・料理教室などにとどまることが多い。これらの地域交流活動では、留学生の異文化性が注目され、地域の国際化のリソースとして利用されている。また、ごく稀なケースとして、大分県では、地域の観光振興に留学生が関わり、「留学生が上海万博で観光地を紹介する」といった報道¹⁰もあったが、広がっているとは言い難い。従来留学生は「支援を受け、サービスを受ける」受け身の存在と捉えられがちである。また、留学生自身もほとんどが「日本を体験する」ことを目的として来日している。しかし、「日中両言語でブログを書いて発信する」という本プロジェクトの活動をきっかけとして、留学生は自ら

の発信力に自信が付き、より積極的に情報発信するという意識づけができるようになった。上記の新聞への投書のほか、facebook等のソーシャルネットワークメディアを活用する留学生も現れた。

留学生Eは、来日後にfacebookを使い始め、ブログを更新するたびにfacebookでリンクを張り宣伝していたこと、そして、実際に自らのfacebookでの宣伝が功を奏して、台湾の観光紹介のサイトに紹介されたことを語った。留学生Eは本プロジェクトを、留学生に鹿児島を深く理解し、その留学生が理解した鹿児島を世界に紹介する、という双方向的な活動であると認識している。この語りにおいて、留学生Eは自らを鹿児島と世界(中国語圏)を媒介する存在と位置づけていることが読み取れる。

【留学生Eの発話】

この活動については、先生方の説明を聞く前にすでに先輩たちから聞いて知っていました。鹿児島に来てから、鹿児島の人々の優しさに感動して、中国大陸の人や台湾の人に鹿児島の良さをぜひ知ってもらいたいと思って、本当に参加したいと思いました。この活動は、鹿児島をPRするためだけではなく、留学生に鹿児島のいろんなところを見せて鹿児島のことをもっと深く理解してもらうための活動でもあると思います。双方向的な活動だと思います。確かに鹿児島県の観光地等をよく知ることができ、おいしいものも食べて参加して本当に良かったです。facebookにもうちのブログを紹介するなど、積極的に発信するようになりました。また、最近ある台湾の観光紹介のサイトを

鹿児島県立短大
短期交換留学生
韓 翔月(23)

3度目の偶然を期待しながら

先日、南九州市のお茶摘みツアーに参加しました。広々としたお茶畑を見学し、その後、お茶摘み体験をしました。この時、あるおじさんが私たちを受け入れてくれました。そのおじさんは中国にも行ったことがあったので、中国のこと、留学生として生活する鹿児島のことなど、たくさん話をしました。そして、おじさんは優しく見送ってくれました。

しかし、二人はまた思いもよらないところで、結婚式が終わり、今度は、私が見送る番です。その後、私はおじさんの連絡先を聞いておけばよかったとも思いましたが、あまり後悔はしていません。なぜか、3度目の偶然があるような気がするからです。

その時は、ゆっくりお話ししましょうね、おじさん。(鹿児島市)

も、今度は立場が逆転して再会したのです。おじさんは結婚式への参加者として、そして私は参加者もてなすアルバイトとして。大勢の人が集まる結婚式会場で、おじさんは私をすぐに見つけてくれました。短い時間しか話せなかったのに、私を覚えていてくれたおじさんの温かさに、私は感動しました。おじさんは優しいままなので私のことを見守ってくれているようでした。仕事中心にもかかわらず、私の目には涙があふれました。

資料 4-4 『南日本新聞』の「ひろば」
(2012年12月13日5面)

¹⁰ 『大分合同新聞』, 2010年4月23日5面。

知りました。そのサイト利用者が私の facebook を見て、ピカリンのブログにたどり着いて、それを紹介してくれています。鹿児島の人にも見てもらえるなどそれも収穫だと思います。

4-2 日本人学生への教育効果

本プロジェクトに参加した日本人学生は計 61 人であった。日本人学生への教育効果等を検証するため、プロジェクトの 2 年目の年度末に、日本人学生 6 人に 2 年間近くプロジェクトに参加した感想を聞いた。日本人学生には、留学生と一緒に活動することにより、国際理解が深まり、地元についての理解を深め再発見できることが、当初期待されていた教育目標である。しかし、実際に日本人学生の声を聴いてみると、教員が当初想定していなかった学びもあったことが明らかになった。

インタビューでは、本プロジェクトへの参加のきっかけと学んだことや、感想について聞いた。参加のきっかけは、大別すると、①教員の勧めで参加した、②友達が参加したので一緒に参加した、の 2 タイプにわかれる。①の教員の勧めで参加した場合、中国人留学生との国際交流に魅力を感じた人もいれば、鹿児島の観光地に行けることに魅力を感じた人もいる。②の場合、「特に目的がなくなんとなく参加した」人がほとんどである。

本プロジェクトでは、「できる時に、できる事を行っていく」の活動方針を取っているため、すべての活動に関わる学生もいるが、広報班や IT チームにのみ参加した学生、実際に留学生と一緒に観光地を回る活動班にのみ参加した学生もいる。そのため、参加した活動の形態により、学生が得られた学びにも個人差がある。この点を踏まえ、本プロジェクトの日本人学生への教育効果として、①地元理解の向上、②外からの視点（留学生の視点）への気づき、③社会とのつながりの獲得、④文化の普遍性と個別性への気づきという 4 点にまとめる。

以下では、日本人学生の発言を引用しつつ、述べていく。学生の発言は原則的にはそのまま引用するが、わかりやすくするため、() で補足する場合がある。また、教員の問いかけも () で示す。

① 地元理解の向上

日本人学生の参加のきっかけの一つは教員の勧めであった。K はゼミ担当教員の説明で、留学生との国際交流に魅力を感じ、「自分のためにもなる、鹿児島のためにもなる」との思いから、参加したという。実際に K はほかの日本人学生 2 人と一緒に留学生と甕島を回った。K の語りでは、「全然知らなかった」「びっくりした」が頻出して、鹿児島出身でありながら、「鹿児島をあまりにも知らない自分」を思い知った時の衝撃が伝わってくる。

【日本人学生 K の発言】

自分ずっと鹿児島にいたんですけど、甕島とかも行ったことなかったし。もうなんか全然知らないことばかりだなと思って、地元にも多分普通に生活しているだけなので、何も考えないで生活しているだけなので全然鹿児島、えーこんなの有名なのだとか、全然知らなかった。

甕島があんなに人が少ないと思っていなかったのだからびっくりしました。

聞いたことは多分あったと思うんですけど、いやなんか、はい。なんか想像と全然違って本当になんか本当に島なんだなと思って。本当に人ってこんなに少ないかなと思って。車も通っていないし、猫がいるぐらいだった。びっくりして。

自分の田舎、自分の実家もすごい田舎なので、人は少ないんですけど、あんなもんかなと思ってたけど、もう全然違いました。



図 4-8 甌島で大自然を満喫する



図 4-9 甌島でガイドさんとの昼食

Wもまた鹿児島県の観光地を巡ることに魅力を感じ、プロジェクトに参加した1人である。しかし、Wの場合、アルバイト等で予定が合わなかったため、遠出の活動には一度も参加できなかった。しかし、プロジェクトに参加したことがきっかけで、鹿児島県をもっと知ろうという意識が芽生えた。

【日本人学生Wの発話】

結局どこにも行ってない。アルバイトがあったから遠出するとどうしても間に合わなくなるから。

(教員：でも入る時は鹿児島を回るとか、目標は)

達成できたのはゼミ旅行で行った甌島ぐらいかね。ピカリンじゃなくて別の活動だったんですけど、でも極力そのピカリンじゃ行けなかったんですけど、JRとか使っているいろいろ行ったことがないところに行っています。

海に遊び感覚で行ったので。でも鹿児島ってこんなきれいな海があったんだとか、地元だったけど意外に。地元だから近くて行かないという場所もあったので。でもきれいなところがあるな、鹿児島こんなところあったんだ、こういう組織というものもあるんだというのは感じます。ちょっとだけは地元について知れたというのだったらピカリンとちょっとはリンクするのかなと。

学生Yは、友達が参加するからなんとなく参加したもので、当初は「国際交流がしたい」「鹿児島のあっちこっち行きたい」とは特に思っていなかったという。しかし、その語りから、活動に参加して鹿児島の知らないところや、行ったことがないところを知るようになっただけでなく、鹿児島のことを留学生に紹介しようという意識の変容がみられた。それが、「新聞の小さい記事が目にとまるようになった」につながったのであろう。

【日本人学生Yの発話】

鹿児島を知るようになりました。ピカリン、国際交流に入っているというなんか意識があったので、なんか新聞のちいちゃい仙巖園の行事とかそういうのもすごい目にとまるようになってたんだ。あ、これ留学生に面白そうだなあって、とか、そういう意識づけが自分についたので、多分前より鹿児島のこと知ることができました。

次の会話の抜粋では、学生MとZは、留学生との活動が、鹿児島についての理解を深める動機づけとなっていると述べている。

【日本人学生MとZのやり取り】

- M 楽しいし、普通に勉強になるし。面白いじゃないですか、自分と違う経験をしてきているわけじゃないですか留学生とか。なんだろうね。知識が、知識と経験はかなりある。鹿児島についても自分で勉強しない、自分が学ばないと留学生にいろいろ教えられないじゃないですか。鹿児島についてとかも。努力は結構したかな。新聞を探したりとか、情報収集能力かなり上がった。
- Z そっか、いろいろ調べたね。
- M 視野がかなり広がったし。なんか懸賞にも手を出すように・・・着付けをまた勉強しなおして、お母さんが教えてくれるからそれでいいんだ。
- Z 普段参加しないようなことにも参加しようかなと思ったりするので結構普通に生活していたらできない感じのことに、しようかなって思って。

以上日本人学生の発話からわかるように、日本人学生が中国人留学生と一緒に鹿児島を回ったかどうかにかかわらず、プロジェクトにかかわったこと自体が触媒となって、日本人学生には、地元をもっと知ろう・理解しようという意識が芽生え、それが結果的に地元理解の向上につながったと考えられる。

② 外からの視点（留学生の視点）への気づき

本プロジェクトでは、留学生と日本人学生が鹿児島の観光地を回り、ブログで紹介する活動のほか、国際交流サークル（学生の発話では「国際交流」）の活動として日常的な交流活動も続けてきた。予定等が合わず遠出できなかった日本人学生も、鹿児島市内に一緒に出掛けたり、スポーツ大会をしたりして、留学生と密に交流していた。

Tは留学生との交流を短大生活のハイライトと位置づけている。家族と行ったことのある公園に一緒に行ったことや、太極拳を教わったことなど些細な日常生活での交流活動を体験して、Tはそれまでに持てなかった外からの視点に気づき、「留学生の視点からものを見ることができた」と振り返っている。

【日本人学生Tの発話】

だからその国際交流は結構身近なところに行ったので、結構行ったことがある公園とか。でもその留学生と一緒にいったらまた違う雰囲気っていうか、家族と行くのとはまた違って。留学生こんな花見たことがないとか、一緒に写真撮って。「へーそんなのが珍しいんだな」って思ったりはしました。あのう県短の2年間のほとんどの思い出がその留学生との交流なので、本当に県短でなにしたら？と思ったら、その勉強とか思っていない。その留学生。そのいつも県短にそんなに楽しかったの？聞かれたら、「中国人の留学生とそのすごい接したのよ」みたいな、「すごいね」みたいな感じで、本当に楽しかったです。ピカリンは、その大人の人としゃべるの、緊張したのもあるし、それは大きいです。国際交流は留学生の視点からものを見ることができたっていうのが大きい。

本当にその行事だったり、中国と違うので、日本はこういう行事。なんだろう、たとえば本当に変な例、日本はそのラジオ体操するみたいに中国では太極拳やるんだよとか言って、みんながそんな太極拳って難しいのにそんなみんなやるんだと思ったりとか。なんか普通にみんなができるのがすごいなあっていう。



図 4-10 時には太極拳を学ぶ



図 4-11 沖永良部の砂浜に書いた文

③ 社会とのつながりの獲得

プロジェクトを遂行していくにあたり、日本人学生は広報や日程調整を担当していた。学生にできることは学生に任せる。これも本プロジェクトにおける学生教育の一環であった。実際に記者会見の日程調整や原稿作りなど難しい仕事を任された学生の受け止め方は人によって異なることがインタビューで明らかになった。

Yはプロジェクトの活動を「仕事」と振り返っている。仕事の内容については、「大変でした」「辛かった」と感想を述べている。具体的には、プレスリリースと記者の取材を受けたこと、肝付町訪問の日程調整を挙げている。しかし辛かったのに、なぜやめなかったのかとの教員の質問に対して、「やめるとは一度も思わなかった」と述べていた。仕事は辛かったが活動自体は楽しかったこと、大人の人と話せてよかったことに、Yはプロジェクトの魅力を感じ、参加し続けたのではなかろうかと推測される。

また、TとWは広報や日程調整にほとんど関わってはいなかったが、Yが述べていた大人と接することの大変さについて、「緊張する」「考え方が違いすぎる」と理解を示している。

【日本人学生Yの発言】

ピカリンはプレスリリースと記者の取材を受けたこと。大人の人としゃべるのがすごく緊張したというのと、たぶんそれがすごくいちばん印象に残っていて。

（肝付町訪問時の日程調整の仕事について）

大変でした。なんだったかな。フェリーの時間とかみんなと合わせるのも大変だったし、なんだったかな。向こうの人と連絡を取るのがばたばたしてて、一週間ぐらいで決めたので、全部大変でした。あったそういえばそんなこともあった、あった。楽しかったです、行ったら。

でもそのおかげで良かったです。いろんな大人の人と話せて。

【大人と話すことについてのY, W, T 3人のやりとり】

Y 違います。全然違います。

W 緊張する。

T うん。

Y 緊張する。

W あとなんか考えとか全然違うよ。(TとYはうん、そうそう)自分がこどもっぽすぎて、ねー。

Y うんうん、わかるわかる。

W 話が通じなかつたりわからなかつたりとか。

本学の学生に限らず、学生が日常接する大人はごく限られている。しかも、プロジェクトの代表として、学外の初対面の社会人との連絡や交渉をするとなると、緊張するのは想像に難くない。しかし、Yは辛かったと述べただけでなく、「いろんな大人のひとと話せて」「そのおかげでよかった」と総括している。Yは、学生でありながら、学外に踏み出し、社会とのつながりを持たれたことを実感したのではなかろうか。



学生ルポ
ブログで鹿児島紹介

米山 喜美子さん 鹿児島県立短期大学
文学部1年



プロジェクトの報告書をつくるメンバー
＝鹿児島市の鹿児島県立短大

鹿児島県立短期大学で、日本人学生十数人と中国からの交換留学生3人が中心になり、昨年1月から鹿児島県の観光情報ブログ「鹿児島魅力発信」を世界に向けて発信する。県産品を県外や外国へ紹介するだけでなく、最近では、経済成長が著しい中国に「鹿児島魅力発信」を中国留学生の目から見た「鹿児島」を通して、中国人留学生に日本語と中国語で県内各地の観光資源を紹介。私は昨年から参加し、外国だからこそ気づく視点を含ませることで、逆により効果を生み出している。相乗効果を生み出して、鹿児島県を世界に広めたい。「小さな大学でも光るアイデアで事業を運営したい」という思いが込められている。

■観光客誘致へ
現在、鹿児島でも活発な観光客誘致。観光客は、鹿児島産の食材や焼酎を消費して土産を購入するほか、宿泊施設や交通機関を利用して販売するよりも大きな経済効果が期待でき、最近では、経済成長が著しい中国からの観光客誘致が大きなテーマだ。

そこで始めたのが、中国人留学生が日本語と中国語で県内各地の観光資源を紹介している情報と、逆に外国だからこそ気づく視点を含ませることで、逆により効果を生み出している。相乗効果を生み出して、鹿児島県を世界に広めたい。「小さな大学でも光るアイデアで事業を運営したい」という思いが込められている。

鹿児島県立短期大学は、留学生ならではの視点を生かして、県内各地に足を運び、四季折々の行事を取り上げていく。春は桜、夏は錦江湾サマーナイト花火大会、秋はおはら祭や妙円寺参りなど、この1年に紹介した話題は決して上る。

■情報を共有
留学生の目を通すこと、日本人の気づかないポイントや見逃している魅力、逆に外国人しか気づかないマナーポイントや改善点を紹介できる。さらに、日中両語で書いてあるため、中国人と日本人が情報を共有できる。

ブログは多岐にわたる。国内で20件以上のアクセスがある。また、中国のいろんなサイトでも紹介されている。

鹿児島県立短期大学は、小さな大学だが、「Think Global, Act Local」(地球規模で考え、地域で動く)をモットーに、レガシーと輝く活動をしていきたい。URL: <http://kagocchina3.sblo.jp>

図 4-12 『南日本新聞』(2012年2月25日17面)に掲載された学生ルポ



中国人留学生3人(前列)のブログを軸に、鹿児島の観光情報発信を提案する鹿児島県立短期大学の学生

県立短大 誘客へ学生プロジェクト

福田准教授は「主体的に動き考え、いろいろな人を知ることが出来る幅広い視点を持った社会人に育ててほしい」と学生の奮闘を見守っている。

ブログアドレス＝<http://www.w.kagocchina3.sblo.jp/>

中国語ブログで観光情報

鹿児島島の魅力

留学生が発信

中国人留学生に中国語ブログで鹿児島島の魅力を発信してもらい、中国、台湾からの観光誘客につなげる試みに、鹿児島県立短期大学(鹿児島市)の女子学生が取り組んでいる。「身近な「人財」を生かす効果的な観光情報の発信のあり方を提案したい」と6月8日、同市である「第19回全国商店街おかみさん交流サミット」の分科会で取り組みを報告する。

交流サミット分科会の一つ、つながらぬ地域、つなげる人の輪」のコーディネーターを任せられた同短大商経学科の福田准教授(37)の呼び掛けに賛同した、南農農業大学からの交換留学生3人と、2年生約20人が「勝手連」としてプロジェクトに参加している。

中国人留学生が県内の観光地などをめぐり率直な感想をつづるブログ「中国留学生眼中的鹿児島」を柱に、日本人学生は留学生の視点を生かした広域観光ルートなどの提案を観光業界や行政にしている。

これまでに、坊津や知覧、指宿などをブログで紹介した留学生の万佳菜さん(21)は、「中国人は鹿児島のことほとんど知らない。坊津の素晴らしい景観などをどんどん紹介したい」と張り切る。

サミットで活動報告する「報告班」の商経学科2年の田村美香さん(19)は「留学生の観光の視点が自分たちと異なることに驚いた」。企業などへの提案を担当する「広報班」の大山絵理香さん(19)は「魅力発信には、自分たちが地域の人や資源をもっと知る必要があることに気づかされた」と話。

図 4-13 『南日本新聞』(2011年5月17日17面)

一方で、記者会見や新聞社の取材等の広報と日程調整を担当していたKは、Yとはやや異なる受け止め方をしている。緊張したと述べているが、「衝撃的」「仕組みがわかった」「貴重な体験」とよりポジティブに捉えている。Kは日程調整が思うようになかった時に教員に相談して対処したことや、記者会見がうまくいかなかったときの「衝撃」など、すべてがプロジェクトに参加したことにより得られた学びだと捉えていることが語りから浮き彫りになった。

【日本人学生Kの発話】

記者会見も記者会見で結構衝撃的だったんですけど。まさか一社も来ないなんて思っていないから。こんなもんだなって思って。やっぱりあまくないんだなと思って。

(教員：大変とかそういう思いでは?)

なかった。たぶんその記者クラブの予約っていうか、電話したぐらいで、自分。記者会見します。緊張してどうしよう。なんか私すごい緊張するので。先生の前でこう、電話しました。研究室の電話で。

(教員：なんで緊張?)

記者クラブってなんかこうかちっとしたようなところかなと思って。なんかそのいろんな記者新聞社とかかわっている中心みたいところだと思ったので、すごいもうなんか断られたらどうしようかと思って、なんかそんな簡単に記者会見ができるかなと思ったので、「はいわかりました」なんか案外さらっとなんか了承してくれたので、びっくりして。「あ、こんなあっさりしているんだ」と思ったんですけど。

新聞、南日本新聞の〇〇さんっていう人に一回お願いしたんですけど、自分連絡取りました。で、最初送った時は、なかなか返信が来なくて、あれ?と思って、やっぱりダメかなと思って、先生のところに行って、どうしようみたいな感じだったんですけど、もう一回送ってみようということでもう一回送ったらなんかこう絵文字つきで送ったんですけど、最後「よろしく願いシマス 顔文字」みたいな感じで送ったら、返事返ってきて。あっ、返ってきた!と思って、絵文字効果かな(笑)。それはたぶん去年の5月、図書館のインタビューしたやつです。

多分やっぱりピカリンしていなかったらできなかったことたくさんあるので、そんな記者クラブの仕組みも知らなかったし、甑島も知らなかったし、留学生があんなに日本語が上手だということも知らなかったし、その考え方から

373 ワイド

Campus wave

キャンパスウェイブ

学生による
学生の新聞

日中両言語のブログで鹿兒島の観光情報を発信する鹿兒島県立短期大学の留学生(手前3人) 11月31日午後、鹿兒島市下伊敷十丁目



留学生ら鹿兒島発信

中国からの留学生と日本人学生が協力し、鹿兒島の観光情報を紹介する日中両言語のブログが好評だ。鹿兒島県立短期大学が、2011年2月から取り組む「鹿兒島プロジェクト」の一環。3月末の中間報告では、活動を紹介する本紙記事でアクセス数が急増した状況を分析。「地方紙に取材されることの重要性を再認識した」とまとめている。

ブログのタイトルは「中国留学生眼中的鹿兒島(中国留学生の目から見た鹿兒島)」。留学生が鹿兒島

島の名所や食べ物文化を体験し、面白い。鹿兒島の経済浮揚に貢献その魅力を発信、中国人の観光客の増加を目指している。

4月から3代目としてブログを運営する留学生は南京農業大学の孫琳琳さん(21)、王靜晨さん(20)、李東露さん(24)。3人は「楽しみながら鹿兒島のよさを伝えたい」という。

サポートする同短大2年、平瀬戸香恋さん(20)は「価値観が異なり」と共通通信でつくるニュースサイトを

新聞掲載でアクセス増

中国からの留学生と日本人学生が協力し、鹿兒島の観光情報を紹介する日中両言語のブログが好評だ。鹿兒島県立短期大学が、2011年2月から取り組む「鹿兒島プロジェクト」の一環。3月末の中間報告では、活動を紹介する本紙記事でアクセス数が急増した状況を分析。「地方紙に取材されることの重要性を再認識した」とまとめている。

ブログのタイトルは「中国留学生眼中的鹿兒島(中国留学生の目から見た鹿兒島)」。留学生が鹿兒島

島の名所や食べ物文化を体験し、面白い。鹿兒島の経済浮揚に貢献その魅力を発信、中国人の観光客の増加を目指している。

4月から3代目としてブログを運営する留学生は南京農業大学の孫琳琳さん(21)、王靜晨さん(20)、李東露さん(24)。3人は「楽しみながら鹿兒島のよさを伝えたい」という。

サポートする同短大2年、平瀬戸香恋さん(20)は「価値観が異なり」と共通通信でつくるニュースサイトを

県立短大 日中言語ブログ好評

中国からの留学生と日本人学生が協力し、鹿兒島の観光情報を紹介する日中両言語のブログが好評だ。鹿兒島県立短期大学が、2011年2月から取り組む「鹿兒島プロジェクト」の一環。3月末の中間報告では、活動を紹介する本紙記事でアクセス数が急増した状況を分析。「地方紙に取材されることの重要性を再認識した」とまとめている。

ブログのタイトルは「中国留学生眼中的鹿兒島(中国留学生の目から見た鹿兒島)」。留学生が鹿兒島

島の名所や食べ物文化を体験し、面白い。鹿兒島の経済浮揚に貢献その魅力を発信、中国人の観光客の増加を目指している。

4月から3代目としてブログを運営する留学生は南京農業大学の孫琳琳さん(21)、王靜晨さん(20)、李東露さん(24)。3人は「楽しみながら鹿兒島のよさを伝えたい」という。

サポートする同短大2年、平瀬戸香恋さん(20)は「価値観が異なり」と共通通信でつくるニュースサイトを

ト「4NEWS」にアップされ、その記事を見た在日中国メディアが紹介。さらに、この記事が中国のニュースサイトなどに引用され、中国からのアクセスが増えたと分析する。

報告では「一般的には海外への宣伝に対する地方紙の役割は限定的だと考えられるが、地元メディアに取り上げられることの重要性を再認識できた」とまとめた。

指導する岡村俊彦教授も「ネットでも、新聞など既存メディアの影響力の大きさが実証された。多様な媒体を通じ、留学生が母国に観光情報を発信するモデルケースを作りたい」と話している。

図 4-14 『南日本新聞』
(2012年6月9日17面)

なにから違うんだなというのもびっくりだったので。

たぶん本当に人生で一回経験できるかできないかみたいなことですよ。記者会見。大変とか、そんなも、貴重な体験。社会を知るきっかけ、やっぱり厳しいんだな、甘くないんだなと思って。

また、学生Mは授業で学んだことをプロジェクトの活動と関連付けて捉え、リーダーシップとは何かについて、より深く理解できたことを述べている。プロジェクトの活動は、学生に授業の講義内容を的確な社会的文脈の中で理解する機会を与えたことが示唆された。

【日本人学生Mの発話】

授業で学んで思ったんですけど、講義が、リーダーシップについてみたいな講義があって、非営利組織の授業で聞いて、「お、そうなんだ」勉強になって。その立場だからわかることで。その講義の内容も。たぶん普通にだったら絶対その講義を聞いてもさっぱりわからないし、何も感じなかったと思う。

(教員：もう自分のやっていることはまさにこれって)

ちょっとずれているところはこうすればいいんだみたいな。やっているからこうすればうまくいくみたいな。充実感はねー、かなりあるよね。どっちかという、大学で勉強したことよりこの内容濃いし。まあ大学の勉強にそんなに興味なかったし。

④ 文化の普遍性と個別性への気づき

日本社会全体の国際化が進む中で、外国人に対する固定観念やステレオタイプがだんだん減っていくことが期待される。しかし、実際には、国際化が進む大都市とそれほど進んでいない地方都市では、外国人に接する機会、頻度に差があり、異なる文化への理解や広い国際的な視野の中で日本社会・文化をとらえる能力、すなわち国際理解度にも違いがみられる。佐藤・橋本(2011)¹¹では、外国人口比率と高齢者率により、留学生の国際化リソース(都市が国際化していくために有効なリソース)としての希少性も異なると指摘し、同じ九州でも福岡と大分では留学生への期待が異なると述べている。日本学生支援機構の最新の統計によれば、平成24年度鹿児島県に在籍した留学生は968人で、鹿児島県の人口に占める留学生の割合は1万人に約5人で、東京都の約6分の1であり、同じ九州では、大分県の6分の1¹²、福岡県の4分の1、長崎県の2分の1である。留学生の人口比が低い鹿児島では、留学生の国際化リソースとしての希少性が高く、また国際交流における留学生の果たす役割も大きいと思われる。

今回インタビューの結果から、自らが持っていた「外国人像」または「中国人像」が実際と違うことに気づいたと述べた学生が複数おり、そして、それらの学生が留学生たちと接していくうちに、自らのステレオタイプに気づき、そのステレオタイプを打ち破り、国籍や出身等の枠にとらわれず、友達として接するようになったと変容していくプロセスが明らかになった。

下記の会話の抜粋はそれぞれ日本人学生MとZ2人のやり取り、及びY、T、W3人のやり取りである。Mは、留学生が遠慮がちだと話した後、Zはいろいろ聞いてくる留学生の名を挙げて、異なる感想を述べている。そこで、Mは「人によって見方が違うんだ」といったん受けとめる。Zはいろいろ聞いてくるDのことを、「学ぼうとしているから質問が出る」と感心している様子だった。ここでは、Zは積極的に質問する留学生の行動を肯定的に捉えていることがわかる。一方で、Mは遠慮がちな留学生と1年前に来ていた留学生〇〇を比較し、

¹¹ 佐藤由利子・橋本博子(2011)「留学生受け入れによる地域活性化—自治体と大学の協働による取組みの横断的分析—」『比較教育学研究』43, pp. 131-153.

¹² 留学生の在籍数が東京、大阪、福岡、兵庫、愛知、埼玉、神奈川、千葉等に次ぐ大分県は、留学生関連施策協議会が結成され、NPO法人が設立され、留学生の誘致に力を入れてきた。留生活支援、地域交流活動支援(学校での国際理解教育、市民向け外国語教育・料理教室、県下自治体への留学生の派遣)、就職支援などを中心に活動している。

両者の違いを指摘し、後期に来た留学生たちがあまり自己主張をしないことをさらに述べた。このやり取りでは、留学生は、「～国人」というくりではなく、ニックネームや、「〇〇さん」のような個人名で語られている。

【日本人学生MとZのやり取り】

- M あと意外と留学生がけっこう謙虚ですよ。私のほうがものを言うみたい。あんまり言わない？遠慮している。今のこの間の3人から結構遠慮する。
- Z (Dのニックネーム) としゃべったら結構すごいこれ何これ何って、すごい聞いてきて。9割答えられなくて。ああ、こんなに、やっぱり勉強したら聞かないといけなかなって。
- M それ以上じゃあ私が聞いているんだ。あ、じゃあ人によって見方が違うんだ。
- Z 日本語とか日本の文化とか、そういうことにいろいろ、たとえばなんか走っている車を見て、日本の車どういう感じ？とか。なんかまわりを見ても全部質問来るんですよ。なんかやっぱ学ぼうとしているとこんなにいろいろ質問が出るんだなと思って。すごいなと思った。
- M それ以上しているんだ私は。結構中国について聞きまくっている。バイト事情とか、大学事情とか。なんか休み時間の話とか。休み時間もすごい長くて一回家に帰るとか。すごい面白い。前の人も、〇〇さん？結構言うじゃないですか。(〇〇さんと比べても)ほかの外人と比べても割と遠慮がちだなと思いました。それか、日本人相手だからそうしているのかもしれないですけど・・・〇〇さん、結構しゃべっているイメージがあって、この間のスピーチの文章とかも(こっちが何か)言ったら(〇〇さんも)言うんじゃないですか。(後期の3人は)ずっと言わないし。
- Z そうだね。確かにこれしたら、ああ、そうなんだ。もうそのまま受け止めてたよね。

次の会話例はY, T, Wの3人のやり取りである。ここでは、Yが、中国人留学生とあまりしゃべれない時期から、普通の友達として付き合うようになったプロセスを振り返っている。「テンションの高い外国人」という固定観念から「おとなしい」と思った留学生がしゃべりづらかったが、1年間接して「人それぞれ性格がある」ことに気づき、普通に接するようになったという。ここでは、Yが「外国人というくりで留学生を捉えていた自分」と自己分析しているのに対して、Tは、自分の中に「～国人」で考えてしまうステレオタイプがあると内省している。



図 4-15 高速船の中で行き先を話し合う日中の学生



図 4-16 沖永良部への飛行機

【日本人学生Y, T, W3人のやり取り】

Y あと最初1年目と違って留学生だからって言って結構構えてた分があったんですけど、2年目になったらなんか慣れてきたっていうか、普通になんかなんだろう私がみる外国ドラマってテンションの高い人が多いじゃないですか。なんかそんな感じじゃー。

T わかる。

Y (高いトーンで外国人のまねをして)「最近どう?」そういうイメージがあったんで、外国人は(そういう)イメージがあったので、なんか(うちの留学生は)おとなしい外国人。(外国人は)みんなそういう(高いトーンで話す)人だと思ってたところがあったので、なんかおとなしい感じ。(話して)みたら、ほんとうにこういう性格かなって思って、それで1年続けたら、やっぱり人それぞれ性格もあるし、ちょっとその考えは間違えてたと思いました。それから普通にそういう性格なんだって思ったら普通に接するようになってしゃべれるようになりました。

Y 外国人はテンションが高いような固定観念があって。あったのでその自分の思い描いている留学生っていうイメージでなかったのになんか接しづらかった、でした。インドネシア行ったときも、まあ私が行った立場なので、まあみんなウェルカムみたいな雰囲気、だからそういうの見てたからやっぱ外国人はなんかそういうばんばん話す人だと思ってたけど、でも普通にFさんとかなんかすごいそんなばんばんしゃべるわけでもないしって感じでした。思っていた。でもそれは留学生としゃべることで改善。

(中略)

T くくりを作っちゃいけないというか、中国人、何とか人みたいなのは本当に本当じゃないと思って。性格本当に違うし、最初からそう決めつけちゃいけないと思います。中国人のイメージとして結構思ったことばんと言われるとか、そういう感じで思って、結構こうみんな自分の考えて、意志があるから、本当になんか、こんな感じでいったら合わないと思ったのもあるし。そんな私、自分の考え何も無いから、なんか話合わないじゃないかと思ってたけど、でも大丈夫でした。

(教員：中国人っていうイメージ持っていた?)

Y・W あまり。

T 私は結構(あった)結構なんかその国で考えちゃう。

Y よく言うもんね そういうステレオタイプ。

W 言う言う。日本人はまじめとか。

T そうそう。そういうのもあった、考えてたから。

(教員：接してみて)

T 全然違う。

この3人の学生のやり取りから、YとTの異文化理解の変容の軌跡が浮かび上がる。前述のように、鹿児島では、観光に訪れる外国人は増える傾向にはあるが、定住外国人や留学生の割合がかならずしも高いとは言えない。実際に本学の中国語を受講している学生に行った調査では、高校まで国際交流等を経験した人は30人中2人とどまっていることがわかった。そのため、実際に外国人と接した経験の少ないまたは全くない本学の学生は、ステレオタイプの固定観念を持っていたり、また外国人留学生と接する前から構えてしまったりしがちになる。そのため、本来なら留学生を迎え入れる側であるはずの日本人学生が適切に振る舞えないことがしばしばある。本プロジェクトでは、プロジェクトでの活動と国際交流サークルや、スピーチコンテストの応援等、イベント的なものから、日常的なものまで、さまざまなレベルでの活動を通して、日本人学生と留学生が日常的な触れ合う機会を保つチャンネルを確保し、そういったステレオタイプや構えの姿勢を徐々に崩していったのではなかろうか。

以上プロジェクトに参加した中国人留学生や日本人学生へのインタビューを通して、中国人留学生と日本人学生の双方向的な学びを紹介した。本プロジェクトでは、中国人留学生と日本人学生が協力して鹿児島各地で取材や活動している中で、地域社会とも従来とは異なる関わりをしてきた。鹿児島の観光地をブログで紹介することにより鹿児島の地域振興に貢献すると同時に、観光地への取材を通して、地域社会との関わりも深まり、また地域社会の活性化、国際化にもつながったのではないだろうか。こうして本プロジェクトを通して、学生同士の学び合いを実現し、さらに大学もさらなる国際化を遂げ、より充実した質の高い教育を提供できるようになるだろう。

プロジェクトに参加した留学生（南京農業大学から鹿児島県立短期大学に留学）

牟 思齊	孫 明孜	王 婷
王 雨羚	王 崢晨	陳 鶯
万 佳樂	孫 冰	蔣 靜曄
王 錦	薛 超月	唐 紅敏
胡 佳妮	陳 舒媛	李 東霞

プロジェクトに参加した鹿児島県立短期大学の学生（順不同）

上園 歩美	藤田 知美	前菌 聖奈
山口 依利奈	前原 奈々	前田 佳純
吉満 千恵	江藤 智恵	本村 実子
霧島 史織	西村 まどか	末川 香澄
田村 美香	平井 朋生	中西 浩美
鶴田 美咲	吉行 楓	塘添 由梨佳
松崎 麻梨恵	米山 喜美子	富永 野々花
吉留 亜紀	今村 彩乃	上葉 葵
大山 絵理香	紙屋 里奈	篠田 千夏
加藤 明日香	高田 美保	島田 真愛
柴垣 いずみ	永田 恵	末吉 翔子
千竈 志及	西 紗希佳	俵積田 知里
肥後 美沙希	福田 優香	福元 未来
前田 桐子	福元 るか彩	宮下 真美
山下 麻衣子	俣野 由里	岩下 愛美
渡邊 愛理	山口 茜	金床 直子
永見 毬	山脇 公子	立山 佳奈
森田 育美	内村 円	東 美咲
高田 綾香	篠原 珠美	山崎 春奈
段 絵理	鶴川 晴那	
西田 千比呂	平瀬戸 香恋	

プロジェクトに参加した鹿児島県立短期大学の教員

岡村 俊彦（商経学科 教授）
福田 忠弘（商経学科 准教授）
楊 虹（文学科 准教授）

編集後記

～3にまつわるプロジェクト～

3年にわたったピカリン☆プロジェクトは本報告書をもって、終了いたします。日本語、中国語（簡体字、繁体字）の**2言語3種類**の表記で書かれたブログを中心としたプロジェクトですが、不思議と“3”という数字が関わっています。

思い返すと、大学の近所の方から「鹿児島でおこなわれる『おかみさんサミット』で、なにか発表を」と依頼されたのがきっかけでした。予算も時間もない中で何ができるだろうかと、本学の強みを考えたところ、「地域密着の短大」、「中国をはじめとした国際交流」、「真面目で積極的な学生」の3つがあり、そこで生まれたのがこのプロジェクトです。プロジェクトを終えて、この3つの強みを再認識するとともに、これらは、我々が助けてもらった人たちの力でもあったのだと実感しています。県内各地の観光関係者は、損得を超えて歓迎していただき、我々の“無茶振り”に応えていただきました。15名の留学生は様々な個性を持ちながら、日本の文化を肌で感じようという意気込みは共通していました。基礎的な日本語能力とともに、パソコンのスキルも身につけていたのは助かりました。学生たちも積極的に参加し、それぞれが出来ることを出来る範囲でやってくれました。こちらから指示しようと思ったらとっくに済ませていたことも、一度や二度ではありません。

「日本語教育」、「国際関係論」、「情報科学」をそれぞれ専門とする教員3人のプロジェクトでもありました。この3人は大学で所属する専攻も違います（日本語日本文学専攻、経済専攻、経営情報専攻）。異なる見方、異なる手法を感じ合えることで、大学教員としても少し成長できたような気がします。資金的にも精神的にも支えていただいた種村学長を始め、多くの教員の協力が得られましたのは、従来の枠組みを超えた3人のプロジェクトに共感していただいたからではないかと思います。

冒頭に、「プロジェクトは終了」と書きましたが、これは「鹿児島県立短大での中国人留学生とのプロジェクト」が一旦終了した、という狭い意味での終了です。「留学生が留学先の観光情報、文化をネットで発信する」というモデルはどの地域でも可能です。場所を変え、言語を変え、留学生の出身地を変えて、この『ピカリン☆プロジェクト』モデルが継続していくことが我々の願いであり、本報告書がその手助けになれば幸いです。

最後に、本プロジェクトに参加してくれた皆さん、協力していただいた皆さんに、この場を借りて深謝いたします。

執筆者一同

2014年3月

【編集】

鹿児島ピカリン☆プロジェクト

【執筆者】

岡村俊彦（鹿児島県立短期大学 商経学科 教授）

福田忠弘（鹿児島県立短期大学 商経学科 准教授）

楊虹（鹿児島県立短期大学 文学科 准教授）

(50音順)

鹿児島県立短期大学 地域研究所叢書
日中両言語ブログによる鹿児島観光情報発信
「鹿児島ピカリン☆プロジェクト」最終報告書

平成 26 年 3 月 31 日発行

住 所 〒890-0005

鹿児島県鹿児島市下伊敷 1-52-1 福田研究室気付

鹿児島ピカリン☆プロジェクト

電 話 099-220-1115（内線 401）

電子メール fukuda@k-kentan.ac.jp

ブログ URL <http://kagochina3.sblo.jp/>

表紙デザイン：岡村俊彦

